
超リアルロボットストーリー 超機動要塞ガギゲゴG t o G

R C

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

超リアルロボットストーリー 超機動要塞ガギグゲゴG t o G

【Nコード】

N9927D

【作者名】

RC

【あらすじ】

ガギグゲゴシリーズ最新作、待望の第4弾。次郎のもとやってきた最大の試練『高校受験』。だがそこで出合ったのは、警告を伝えようとする怪物だった。彼が知らせたかった危機とは？物語は、宇宙へと進んでいく。

第一話 あの世界は、今

物語は、S・O・A・最終話から始まる。

「それにしても…どうなつてんだ、お前の体は？」

奇跡的に命を取り留めた、というより健康的被害をまったく受けなかつた次郎。それを見て、一同は啞然としている。当たり前と思えば当たり前な事だが。

「さあ…僕自身でも分からないですよ。ただ…セロファンが言っていたことは正しかった、ということでしょう。どう考えても非科学的なのは変わりませんが。」

「そういうことか…よく分からんが。」

ドッペルゲンガーはなんとなく納得してみた。

「一応は大丈夫のようですが、念のため、後日次郎君の詳しい身体検査を行います。」

担当の医師はそう言ったのを最後に、部屋から出て行った。

「RCさん、これからどうしますか？」

役立たずのまままで終わりになるうとしている天才技師に、次郎は尋ねてみた。

「せっかく来たんだ。とりあえずは機体の方を調査、できれば改善していこう。もしできなくても…今後使う予定はなさそうだがな。」

だが、もし使う事があつたら…」

「…あつたら？」

「もう一度、君にパイロットになつてもらつしかないな。」

「また覚悟を決めろというのですか？」

想定の話にも関わらず、彼は少々怯え気味だった。だが、そんなこと気にもせずRCは断言する。

「いいか？今の状況をまとめるとしたら…こういうことになるだろう。『ゴッド・ガギグゲゴを使えるのは、山田次郎しかない』と

な。確かな実験が出来ない以上、他の人にやらせるわけにはいかない。そして…君は、無事それを成し遂げた。だから、そういうことになる。」

そう言つて、彼もまた部屋を出て行き、ガギグゲゴが回収・保管されている地下室へと向かった。もちろん、なにかが気に障つたのではないと次郎は分かっている。

「じゃあ、僕らもそろそろ帰ります。」

「あ、ああ。くれぐれも家では安静にしておけよ。」

次郎、共に廉も部屋からいなくなった。現在、そこにはドツペルゲンガーただ一人である。そして3秒ほど経つた後、自分だけここにいる必要もないな、と彼は気付き、足を動かさずとした。特に意識はしていないが、ふと窓を見た。だが…

「こ、これは…UFO!？」

その時、彼の目に飛び込んできたのは、空に浮かぶ無数の円盤状の物体だった。慌ててドツペルゲンガーは、窓のそばに駆け寄る。すると、すぐにUFOらしき物体は空に消えていった。

「…なんだつたんだ…今のは…。」

それから約3カ月が経とうとしていた。

200X年、某都市。変態能力を持つ恐ろしい怪物と、和解による中立を願う人間の戦いは、既に昔の話になっていた。一度、地球規模の大きな事件があつたが、それはある少年の勇氣ある行動によつて、防ぐ事ができたのだ。その少年は、今…。

(うつつ…なんと問題だ…。)

ここは、某都市内でトップともいえる市立高校である。そこに、山田次郎はいた。

(でも…この試練を突破しないと、僕の運命にかかってくるんだ。だから…なんとかして頑張らないと。)

状況を察すると、彼は今この高校の入試試験を受けている最中のようだ。むろん、中学校では一位二位を争うほどの秀才の次郎でも、油断していたせいか四苦八苦している。

（去年あたりからしつかり勉強しとくんだったな…まあ、僕の場合はほぼ不可能だったけど。）

自分の過去を振り返りながら、そのバトル・オブ・デステイニー、すなわち『運命の戦い』に挑んで行った。

「もう少しまともなメシを出せないのか？」

「何言ってるんだ。自分の立場をよくわきまえろ。」

某都市市役所の中にあるアメシストの基地では、二人の男が言葉を交えていた。

「転落死を免れただけでも、運が良かったと思え。処刑だって今すぐやりたいところだ。」

「ならなぜしない？」

体全体を包帯で巻かれた男は、白衣を来た博士らしい中年男性に尋ねる。

「何回も言っただろう。もしかしたら…お前を殺すと、またあいつが生き返ってくるかもしれない。『神は生死を操る事ができない』」

「だっけ？たしかに、お前とセロファンが入れ替わるにあたっては特に問題は無い。強いて言えば、あいつの方が多少利口だ。だが…もし、我々の眼の届かないまったく別の場所にその姿を現したらどう

する？次郎にアドバイスをした良心を持つ男でも…世界征服を企む悪党に変わりはないってもんだ。だから…」

「妄想もほどほどにしておけ。馬鹿馬鹿しいにもほどがある。そもそも、セロファンは生と死を、私は死と生をもう受けた。その時点でお互い±0、元の状態に戻っている。可能な限りの平等を願う神

のことだ…またセロファンが甦る事はないだろう。」

「実証データでもあるのか？ないだろ？」

「ああ、ないとも。だが、私は亡き部下のことを信じている。それ

だけのことだ。」

「その部下が今いるのは空の上の世界だ。宇宙じゃないぞ。『あの世』という場所だ。それを理解しているのなら…あとで線香でもあげとけ。」

そう言つて、彼は医務室を出て行つた。レイクは、仕方なく再び昼食に手を付ける。

「…いつか…目に物を見せてやる…人間共め。」

(あと少しだ…あと少し!!)

一方、次郎は最後の問題の答えを頭に浮かべていた。そして、すぐにその答えは見つかり、答案にシャープペンシルを近づける。最終問題ということもあり、点数もそれなりに高い。ただでさえ他の問題で間違っているかもしれないので、ここで過ちを犯すことは今受験の命取りだろう。

その時、無意識に次郎の目は腕時計へと運ばれた。残り時間が気になったのだろう。普通では手に入らないその腕時計の示す情報を見る限り、時間の余裕はまだありそうだ。ほつとひと安心して、思わず腕を途中で休ませ、一呼吸置いて落ち着いてから書こう、となんとなく思ったのだ。カンニング的な意識はないのだが、彼は他の受験者たちを見回してみた。同じ中学校から受験している知り合いもいれば、同じ市に住んでいるのにまったく見知らぬ人もいる。かと思えば、灰色の体をしている怪しい人型生物も。みんなやつぱり難しいのか、と内心笑う次郎だが…。

「…って、笑つてる場合じゃない!!」

そう、その場所には、サイエンサーが発生しているのだ。それも、すぐ隣の席に。次郎は慌てて、自分の持つ腕時計から謎の超音波を発生させる。

「な、なんなんだ、貴様は…」

超音波により辺りが静まりかえつたら、とつさに彼は、足を後退させる。最後にサイエンサーとの戦闘を行ってからだいぶ長い時間が経っているため、今次郎は武器系の小道具を持っていなかった。なにも話そうとしないサイエンサーを警戒しながら、次郎はGウオッチのスイツチを押す。

「こ、こちら隊員624、山田次郎…!!」

「おお、次郎か。久しぶりだな。元気だったか？」

懐かしいオペレーターの声は、次郎がどんな心境なのか構わず、そんなことを言った。

「只今、サイエンサー発生を確認!!すぐに、戦闘員を…ガギグゲゴをこつちに!!」

「な、なんだと!?!わ、分かった。戦闘を許可、応戦してくれ。すぐに機体をよこす。」

「早く…早くしてくれえ!!こつちは受験中なんだよ!!」

敬語の使用すら忘れている次郎は、既にパニック状態だ。久々に見る怪物に恐怖している、という理由もある。

「お、お前は友好宣言を知らないのか…」

「存じ上げていますよ。」

「じゃあ…どうしてその行為をするんだ!?!」

「別に戦おう、ということではありません。ただ…伝えたいことがあるのです。」

「…?」

その言葉を聞き、次郎はいったんサイエンサーに近づいた。何度も見ても気味の悪い生物だな、と次郎は思った。サイエンサーの口が開く。

「戦いが…始まるのです。」

第二話 予言者セシウマン

同じ頃、アメシスト基地では。

「ストックホルム大佐、隊員山田次郎から、サイエンサー発生ของ シグナルが出ています。」

「何言ってるんだ？」

次郎からの謎の通信に、アメシストの人たちはやや戸惑っている。「ここ数ヶ月のサイエンサー発生数は0。次郎を疑っている訳ではないが、今更そんなこと……」

「いいや、ありえるな。」

割り込んできたのはドツペルゲンガー。

「ドツペルゲンガー、そっちの仕事は終わったのか？」

「あいにく悪党の看病など好きではなくてな。さつさと片付けましたよ、大佐。」

「アメシストが世界から撤収する最後の最後になっても、その性格は変わらないようだな、君は。」

「へいへい。」

おちやらけながら、ドツペルゲンガーはGウォッチに手を近づける。

「念のため、ガギグゲゴを出撃させましょう。『パイロット付き』でな。」

「『戦い』って……なにか根拠でもあるのですか？」

「ええ、ありますとも。」

高等学校の試験会場、つまり教室内では、少年と怪物の対話が続けられていた。

「実は私……特殊能力というものを持ってましてね。」

「それが……なにか？」

「私、予言者なのです。」

その時、学校外から大きな機械音がした。

「…もしかして…」

次郎の予想は運悪く的中した。校門の桜の木をなぎ倒しながら近づいてくる巨大な要塞状の物体は、スピーカーから音声を出した。

「次郎、大丈夫か!？」

「先輩、今行きます!！」

ご存知、鈴木廉とドッペルゲンガー博士だ。二人の乗っているのは、アメシストが使用するロボット兵器、超機動要塞ガギグゲゴ。ガギグゲゴは次郎の声など聞かず、変形を進める。

「超機動要塞、ガギグゲゴ!！」

すぐに、ガギグゲゴはGブラストを連発した。中の二人が慌てているようで、あまりターゲットに当たってはおらず、そのほとんどは校舎を破壊しているだけの迷惑なものだ。そしてなぜか次郎の相手をしている怪物が倒れた。次郎はすかさず、ガギグゲゴに大声で叫ぶ。

「博士、廉…これ、違ってますよ!！」

「予言者だって?」

仕方なく、状況が状況なので一度サイエンサーを連れて一同はアメシスト基地へと移動していた。

「おそらく、『予知夢』とかいう特殊能力を持っているんでしょう。」

「そんなの聞いた事ないぞ。」

横たわる一人の怪物を見ながら、ドッペルゲンガーは笑う。

「たしかに言っただんですよ…『自分は予言者だ』って。よほど珍しい能力だと思いますが。」

「言ったにせよ言わなかったにせよ、寝てちゃ分からんな。」

「目の前に悪魔のような機械の巨人が現われたんですよ?自分の力

に自信がなければ気絶ぐらいしますよ。」

「ガギグゲゴを呼んだのは先輩ですよ。」

「しょうがないだろ、そういう規則なんだから。」

「なぜ自信がないのに変態したんだ？変態したら戦闘が必然的に起こる、ということは把握していたはずだ。お前と話をしたかっただけなら、別の方法があるんじゃないか？」

「思いつかなかったんでしよう、きつと。呼びつけて『実は私、サイエンサーで…』なんて話をされるのはストーリー的に地味ですし。」

「ここで一旦、話は句切れた。」

「で、こいつはなんて伝えただ？その、『予知』って能力を使っ
て。」

ドッペルゲンガーの率直な質問に、次郎は答えた。

「また…戦いが始まる、と言っていました。」

一瞬、沈黙が流れた。

「今…なんだった？え？戦いの始まりだ？」

「そうです。真偽は分かりませんが、このサイエンサー、データによると『セシウマン』と呼ばれているこれが、そう言っていたのです。もちろん、本物の予言者なのかそれとも新手的詐欺師なのか、起きてもらわないと判明しません。ただ、そう僕に伝えたのです。」

「…冗談が過ぎるぜ、まったく。今まで二人の凶暴な悪党を退治してきたんだ。その上で…また敵が現われるのか？じゃあ、今度はなんだ？侵略者か？何処から来る？」

狂ったように笑いながら問うドッペルゲンガーに、釣られて少々微笑みながら次郎は答える。

「侵略者ですか。そうですね、例えば…」

その時であった。アメシスト基地の窓から、眩しい限りの光が差し込んだ。この世のものとは思えない明るさだった。

「な、なんだ…」

三人は、目で光をさえぎつつ窓を覗く。そこにあっただのは…。

「…宇宙…人!？」

正確には、俗に言う『未確認飛行物体』、すなわち『UFO』を目撃したのである。それはいくつかの集団で、空中に漂っていた。

光はそれから発せられているものだ。しかし、明らかにSF映画やテレビで見えるような家用ビデオカメラで撮った映像とはなにかが違い、緊迫感があった。それらはどんどん高度を下げていつている。「い、一体何が起きているんだ?」

驚きを隠せないところで、ストックホルムが走ってきた。

「お、司令官直々の命令か?それも走ってくるほどの。」

「のんきなこと言ってる場合か!今すぐ、超音波を発生させる!!」「なぜに?」

「市民はこの光景を見て、パニック状態に陥っている。だから…我々にできる事をするんだ!」

「おいおい、サイエンサーに関係のないことじゃないのか?」

「いいから早くしろ!!」

「は、はい。」

言われるがままに、ドッペルゲンガーは部屋を出て行った。

「次郎、廉、君たちは…ガギグゲゴで出撃の準備だ。」

「え、出撃ですか?」

「この空飛ぶ円盤に乗っているやつらが何者かは不明だ。だが、もし予想される宇宙からの侵略者だったとしたら…ひとまずは防衛するしかなくなってくる。今世界で一番強力な兵器は、ガギグゲゴなんだ!」

「了解しました。すぐに準備にとりかかります。」

二人の少年は、機体格納庫へと向かった。

(今…何が起きているんだ?)

次郎自身、まだ心が落ち着いていない。なにより、全てが初めて臨時の出来事だからだ。

(推測からすると敵は宇宙人か…2話にしてすごい急展開だな…。)
コックピットのハッチを閉めると、やや懐かしい匂いのするシートが次郎を包んだ。

(でも、もしそうだとしても…地球をやらせはしない。)

高度を下げたUFO群は、地上に降下する、と初めは誰もがそう思った。だが、違った。UFOの一つ一つは、なにやら大型の円柱状のものを落としていったのだ。

「なんだありゃ？」

「ミサイル…ではなさそうだな。」

基地内から二人が警戒し見守る中、その物体は爆発することもなく地上にぶつかり、設置されたような位置になった。よく見るとそれはカプセルで、中にはうごめく『何か』が存在していた。

第三話 招かれざる客の訪問

事は、某都市だけに起こっているわけではなかった。

「ありやなんだ？」

ロシアのとある工場。影に入る男の顔と目は、謎の空飛ぶ円盤に向けられていた。

「…地球降下作戦か…はたまた宇宙戦争の始まりか…。まあいい、なんとかなる。私には関係のないことだ。」

のんきにそんなことを言う彼だが、内心、不安の文字が立ち込めていた。

「空が…落ちてくるぞ!!」

「はあ!?!」

イギリスの住宅街。一人の少年は、友人の意味不明な言葉に頭を傾ける。

「だから、空が落ちてくるんだよ!!」

「だからなんなんだよ!!」

「みてみりゃ分かる!!」

仕方なく、騙された気持ちでふと空を見上げる。すると、そこには…。

「…なにが空だ…あれは…UFOだ!!」

そして、アメリカ合衆国も同じであった。

「国防長官、どうなさいますか？」

緊急の事態に、長官はしわを寄せて答える。

「全てが予想範囲外だ…ううむ…。」

「まだ、戦闘が起こると決まったわけではないのですが…起こってからでは遅いのです。早めに手をつっておかなければ…」

「一応はうつてある。」

彼は、ポケットから一枚のカードを取り出し、提示した。双方とも、これには見覚えがある。

「政府の人間なら…君も、話は聞いてあるだろう？」

「え、ええ。怪物だのロボットだので半信半疑ですが。」

「現時点では、その組織…ルビーとやらに、国の運命を委ねている。敵が宇宙人では自衛隊など役に立たなくなるからな。かといって、核を使うわけにはいかない。」

「え？我が国も核を保有しているのです？初耳ですが？」

「あ、ああ、冗談だ、冗談。アメリカンジョーク、分かるか？国連の提唱国であり加盟国でもあるこのアメリカがそんなはずないだろ。」

どこからか出てきたハンカチで冷や汗とも言える汗を拭きながら、ため息をもらした。降下してくる円盤を窓越しに見ながら。

だんだんと陸に迫る未確認飛行物体の中で一機、ついに地面に着陸した。そしてすぐに、物体のドアが開く。これには、次郎と廉でさえもかなり気になり、ガギグゲゴを飛び出してすぐ近くにまで来ていた。むろん、物陰からの観察で姿は見えないようにしている。ガギグゲゴも遠隔操作ですぐに取り寄せる事ができる状態だ。

「次郎、大丈夫か？」

「はい、今のところは。動きがあり次第、連絡します。」

『偵察』としての任務もあるので、ストックホルムも現段階では彼らの行動を許可している。

「先輩、どんなのが出てくるんでしょうねえ。」

「さあ…よほど見苦しいものでなければ、なんだっていいよ。人型だろうが、タコ型だろうが。」

そこへ、ドッペルゲンガーが小走りでやってきた。

「心配だから来てみたんだが…どんな感じだ？」

「博士がいるとますます心配ですがね。まあ、特に注意することはないです。あ、今宇宙人が…！」

3人は息を止めてそれを見つめた。

ゆっくり出てきたのは、乗り物の大きさからも想定された人間サイズの生物だった。文明が発達しているらしく、衣服のようなものを身にまとっている。そして、よくある宇宙人像と同じく、人型。目や鼻、口などの器官がついていて、肌色の皮膚をしている。髪の毛もある。手や足もあり、かなり人間に近い。

「…博士…ちよつと言わせてもらってもいいですか？」

「ああ、構わん。俺が言う場ではなさそうだ。」

「じゃあ言いますよ。」

次郎は一息ついてから、宇宙人に聞こえない程度の大きな声で言った。

「どう見ても人間ですよ！」

「…あ、たしかにそうだ！すげえ、俺にもわかったぞ。」

「上の説明文を見れば誰でもわかりますよ…！」

「静かに…！」

廉が注意したおかげで、約2名は気付いていなかったが一度こちらに目を向けていた宇宙人は、再び別の方を選んだ。それを見てホツとしたところで、次郎は音量に注意しながら疑問を投げかける。

「…で、やつらは宇宙人なのになんで人間の姿をしているんですか？…まさか、これも以前あったドッキリかなにか！？」

「そう思いたいが、こんなスケールのかい事ができるやつはこの世にはいないだろう。」

「ならなぜ人間？ありえませんかよ。」

「いいえ、ありえなくもないですよ。」

口を挟んだのは、なぜか廉。

「僕の論理にすぎませんが…生まれた星の環境さえ地球に近い、もしくはまったく同じならば、可能性はあります。」

「じゃあ…まったく同じ進化の過程を歩んだ、って言うの？」

「つまりそういう事です。人間だって、ちゃんと意味があつて進化、今に至つているんです。それほど大きな確率ではありませんが、もしこの地球での進化の過程が完璧なものならば…その星でのそれも、近くなるはずですよ。ある人はこう言ってますよ。『地球を人間が支配しているのは、偶然ではなく必然だ』と。」

「どうもよく分からない…。」

「俺もだ、廉。」

「でしようね。」

すると、ドツペルゲンガーは突然歩き出した。それも、宇宙人が立つ場所へ。

「は、博士、なにしているんですか!？」

「相手は人間だろ?頭が良けりゃ言葉が通じるかもしれない。通じたら通じたで、ちゃっちゃと事情を聞いて友好関係築こうじゃないか。」

そう言つて、彼は勝手に飛び出した。宇宙人もこれに反応し、ドツペルゲンガーと面を合わせる。本物だと証明されている方の人間から、口を開いた

「えーつと、えくすきゅーずみー…。」

その時、廉が彼の背を引っ張つて物陰に連れ戻した。

「博士、あんたつて人は…!」

「え?なんかまずいこと言つたか?そりゃあ俺だって、意味は知らねえけどどつかの国でよく使われている言葉だつて知つてらあ!」

「そうじゃないんですよ!」

廉は説明を始めた。

「いくら頭が良くても、それも簡単に話を通じるわけじゃないですよ。ジェスチャーじゃないんですから。…仮にですよ。さっき博士が言

った言葉は、地球では何の問題もないですけど、もし、あっちの星では、その発音の言葉が別に存在していて、それが人を侮辱する言葉だったら…どうするつもりだったんですか！？スーウォーズになりかねませんよ。」

「…なんでお前はそんなにこういうのに詳しいんだ？」

「SF小説を読むのが趣味なんです。だからその…何もしないのが一番です。観察しましょう。」

彼の説教で、しぶしぶ後ずさりし見えなくなる位置に入った中年男性。その後も、廉の言う通り待機を続けようと3人は思った。だが案の定、一度姿を見られたため宇宙人は近寄って来た。そして、その生き物は首をかしげた後、こう言ったのだ。

「我々は、惑星ゴオカムより来た。用件は一つ…この星を渡せ！！」

第四話 地球強奪作戦

「は？」

3人は、大きく口を開けた。地球人からはUFOと呼ばれているその宇宙船から、他にも2名ほど宇宙人が降りてきたところで、彼は一度せきをしてまた話し始めた。

「すまないな、単刀直入すぎる言葉で。だが…意味はそのままだ。この星を我々のものにさせてもらおう。」

「いや…ちよつとお待ちくださいな。」

宇宙人に気を悪くしてもらっては困ると、使い慣れない敬語でそう言ってから、ドツペルゲンガーは再び彼の目に入らない場所に二人の少年を連れて行く。そして、話し合いが始まった。

「おい、なんなんだありや。日本語を話したぞ。」

「トラン フォーマーじゃありませんが、侵略するんですからその星の言葉ぐらい調べて覚えてたんでしょ、きっと。なぜ英語じゃなくて日本語を選んだのかは不明ですけど。」

「そうか…まあいい。言葉が通じりゃ話は簡単だ、ああ。」

笑みを浮かべたドツペルゲンガーは、いきなりでかい態度で宇宙人の前に立った。

「あのなあ、ちゃんと言葉分かってんのか！？馬鹿なこと言ってるんじゃない…」

その時、彼をさしおさえて現われたのは、ストックホルム大佐であつた。

「た、大佐あ、ここは私に…」

「いや、だめだ。次郎君と廉君をつれて基地に戻っている。」

上司の命令に逆らえず、どういつもこいつも俺の出番を奪いやがって等の文句を呟きながら3人は戻っていった。すかさず、休む時間も与えずに宇宙人は口を開いた。

「詳細は出来るだけ話したくない。…いや、話す必要もないだろう。」

君たちがこの星からはなれ、我々ゴオカムの者が使用する。それだけのことだ。」

言葉をまとめた宇宙人は、ストックホルムの顔を見つめる。現時点では、お互いに相手が各星のお偉方だと思っているだろう。数秒考えてから、ストックホルムは答えを出した。

「…この星の住人、私たち地球人にも、権利というものがある。…悪いが、その要求を受け入れるわけにはいかない。」

「なぜだ？宇宙船はこちらで用意してやろう。新たな星を探す時だって、協力してやるとも。うまくいけば、今よりいい星に住めるかもしれない。さしつかえなかるう。」

「そういふ問題ではない。」

鋭い目つきで、彼は言った。

「ここは、地球。私たちの星なのだ。君たちが何者であろうと…渡すわけにはいかん。」

「…分かった。健全な答えだな。だがな…我々とて、なんの計画もなしに来たわけではない。」

「なんだと？」

「…我々がさきほど地表に落としたカプセル…その中には、ゴオカムで一番凶暴とされる生物が入っている。…君たちがそれを倒せるかな？」

「もうすぐ…」

目覚めた自称『予言者』であるセシウマンは、窓を見ながらそう発した。

「『未来』と『現在』が重なってしまうのですね…。運命には逆らえない…皮肉な法則です。私が…もう少し早くこのことを伝えられていれば…。」

なんともいえない気持ちだが、彼の心を漂う。

「そこまで見えたわけではないが…私には『予想』できる。今回はかりは、勝つことは出来ない。今までにない…戦いが始まる。私は地獄は見たくありません。だから…」

やるうとしたことは計画性がなくてもまず実行する。そういう性格の彼、セシウマンは、突然行動に出た。

「ビアオ少将閣下、交渉は上手くいきましたでしょうか？」

名も知らない地球人との面会を終えたこの宇宙人、ゴオカム星人のビアオは、最後にかけて言葉を頼りに、自信たっぷりで円盤内に帰ってきた。

「中の上というところだ。完全なる勝利のためには、やはりフィジツカー、いや、Pタイプのできそこないをこのような形で使用しない手はないようだ。」

「…言い換えれば『攻撃』ですよ。」

「分かっておる！私とて…できればやりたくはない。誰だってそうだろ。しかし、星のためなんだ。みんなのため…仲間のため。我々がこれを行わなければ、ゴオカムが破滅する。…仕方がないのだ。この計画を創ってくださっている將軍だって、嫌々やっているはずだ。そして、これは將軍からの命令。逆らいようにも逆らえない。」

ビアオのセリフで、もう一人の宇宙人は頭を下げる。

「3分後、カプセルを開放し活動を開始させる。それまでにいい対応があることを願おう。…エヅー、船を上げる。いつでも戻れるようにしておけ。」

「は！」

ためらいながら、彼は宇宙船の操縦席に足を運んだ。

「おう、あぶなかった。死ぬかと思っただぜ。」

「宇宙人の騒ぎなのに、こんなところで死んだら洒落になりませんか。」

一方あの3人は、なぜか煙の出る市役所の下で、落ちてくるガラ

ス片などをくぐりぬけながらなんとか生き延びていた。

「軽く言うけど、一体なにがあつたんだ？」

「さあ。こちらでも軽く答えますけど、機械の故障か、もしくは…基地内のサイエンサーの誰かが特攻でもしたか。そんな人いないと思います。」

「どの道、今は別にすることがありそうだ。」

「大佐、お話はどんな感じですか？」

「どうにもこうにも、無茶苦茶だ。とりあえず、地球は守った。それに、君にはやってもらうことがある。」

ストックホルムは、基地の方を向いた。基地が爆発したような状態になっているのが気になったが、一番の課題を優先させるために、すぐに話をきりだした。

「それって…ウイルスみたいなものですか？」

「分からない。『ライオン』のような猛獣の可能性も高い。ただ、『生物兵器』とも言えるそれには、充分注意しなければならん。すぐに攻撃準備にかかってくれ。」

「了解。」

次郎と廉は走り出した。片方は某都市市役所、もう片方は少し遠い隣の役場に。

（宇宙人め…どんな敵を用意したんだ？）

自信と不安の混じる彼の心は、どちらかというと怯えていた。

（ガギグゲゴで対抗できるかどうかも分からない。今まで僕が経験した戦闘とはまるでちがうはずだ。でも…やるしかない。この星を守るために。）

そこへ、ドッペルゲンガーから通信が入った。

「次郎、今カプセルが開くのが確認された。お前らには悪いんだが、

念のため大佐と俺は市役所に戻っている。だから距離の関係でそちの様子がよく見えん、詳細な報告を頼む。それと、さっきあった爆発、原因は不明だが死傷者は出なかつたらしい。みんな野次馬になつて外に出ていたようだ。」

「そうですか…よかつたです。」

その声と同時に、通路が開いた。そこからガギグゲゴが地表へ出て、正体不明の敵との戦いが始められる。心を決め、彼は動く。

「山田次郎、ガギグゲゴ、出撃します!!」

カプセルから出たその生き物は、レーダーには映るものの足が速いようで、なかなかモニターに映ろうとしない。だが、逃げているのではなく、こちらを観察しているのだな、ということは次郎にも分かつた。

「なんとか、姿だけでも見ておかないと…こちらが不利すぎる。」

次郎も、できるだけ速くガギグゲゴを動かし、それを目に収めようとしている。そして、とうとうモニターに形を現したのだ。だが…。

「次郎、敵はいたか？」

「いたもなにも、宇宙人が使うその生物は…サイエンサーなんです。」

第五話 反撃の地球人

「何言ってるの？お前の敵はエイリアンで、サイエンサーじゃ…」
「そのエイリアンが、見た限りではサイエンサーなんですよ！と、とにかく、相手がサイエンサーなら話は簡単です。早いところけりをつけます。」

次郎は恐れることなく、怪物に突進していった。巨大化はしていないその小さな体だが、何か様子がおかしかった。

「こ、こいつは…」

ようやく巨大化したその大きさは、なんとガギグゲゴ、つまり通常のサイエンサーの1.5倍ほどにもなった。

「星が違えば大きさも違うのか！？人間はほとんど同じだったのに…ええい、攻撃あるのみだ！！」

ガギグゲゴは腕を曲げ、必殺技の発射形態に入る。

「Gプラスト！！」

眩い光が、暗くなってきた空を照らす。ビームは、サイエンサーらしき生物に直撃したのだ。だが、そのすぐ後に見えたのは、発射前とまったく変わらない姿だった。そして、敵はすさまじい勢いでガギグゲゴに腕を振り下ろす。すれすれのところでそれを避けるが、また一発。何発も連続し、怪物の攻撃は止まらない。

「博士！なんだか！知らないですけど！こいつ！とてつもなく！強いです！！」

「地球でいう悪性タイプのようなものじゃないのか？まあ見えてない俺には分からんな。」

「そんなこと言っていないで！何か！策を！」

そう叫びながら通信をしている間にも、敵はこちらを狙う。

「た、たしか博士！悪性なら！雷斗忍愚・武零！怒！が有効です！だからギャギユギョを！！ああ！！」

「…すまない次郎。ギャギユギョなら…友好宣言とかあったから、

開発元のRCのところに戻しちまったぜ。今頃、量産したのも合わせて、工場に訪問しに来た客とかに配っているだろうよ。」

「はあ！？じゃあ、どうすんですか！！」

「大丈夫だ、まだ手はある。…兵器管理担当、GゼウスとGデメウスを射出してくれ！」

「え！？ちよ、ちよつと…」

そこで、怪物のパンチが当たり、ガギグゲゴに大きな衝撃が入った。そのショックだろうか、ドッペルゲンガーとの通信回路も壊れたらしい。モニターで見えてくるのは、不吉な予感を発生させる2機のメカ。数千年前のものはずなのに、整備の中で磨き上げられているせいか、使用感はほとんどない。ガギグゲゴは、最大の出力でサイエンサーを投げ飛ばし、距離をとった。

「前々作19話の名シーンを返せ！！くっ！！」

次郎は、焦りながらボタンを押した。搭乗したメカが分離、巨人の体に装着する。

「無敵機動要塞、ゴッド・ガギグゲゴ！！」

神の名を持つその機体は、サイエンサーに飛び掛った。一度このモードを使ったことはあるものの、戦闘としての使用は初めて、試すような感覚で動かす。

「Gバリアー！」

相手と接する直前で、ガギグゲゴに薄い膜のようなものができた。次郎はこれを『盾』ではなく『鎧』として利用し、ぶつかったサイエンサーに大ダメージを与えた。

「これが…神の力か…」

改めてその機体の強さを知った次郎は、血反吐を吐いて横たわるサイエンサーを見ながら空へと上がる。サイエンサーは、なにかを言っているようだった。聞き取ってみると、それは言葉とは言えない

いわめき声だ。

「言葉話さない…知能が地球のサイエンサーより衰えているのか？こいつは？」

だが、そんなことに關心している時間はない。復活する前に、自分の体を気にしながら最後のとどめをさす。

「射威認虞・紅羅ツ写亞！！」

「うわああああ！！」

廉の乗るコピー・ガギゲゴは、怪物とじゃれあってた、というより、激しい交戦を行っていた。

「さっきまで一体しか出てなかったのに…なんで出てくるんだ！！それもこんな強いのが！！」

誰にでもなく発する言葉に、サイエンサーは聞く気もない。このままではやられる、と思ったその時、光の渦がサイエンサーを包み、消滅させた。

「今のは…ゴッド・ガギゲゴの…先輩！？」

「廉、後退しろ！普通のガギゲゴでは無理だ！こっちで退治する！！」

「は、はい！！」

自分より年長の少年に言われ、彼は足を戻した。

「これは一体…」

一方、円盤内からピアオが見たものは、彼を唾然とさせるものだった。

「なぜやつらが…フィジッカーに対抗できる兵器を持っているのだ！？」

「分かりません。もしかしたら…対フィジッカー専用の兵器なのかもしれません。」

「そんな馬鹿な！では、この星に…フィジッカーがすでに存在していたとでもいうのか！？我々と同じ生物がいることは、報告があっ

たが…そんな事実、聞いていない!!」

怒りをあらわにした彼は、すぐに命令を下す。

「エズー、準備どころではない!早く、將軍に報告できる域まで船を動かせ!!」

「は!!」

「うおら!!」

Gバスターから出る光は、あたりを一掃した。だが、次から次へと、倒すたびに敵は出現する。どうやら、落とされたカプセルは大量にあるようだ。

「博士、いくらなんでもこれでは…多すぎます!」

「大丈夫だ、次郎の体ならもつ。いざとなったらビタミン剤を送る。」

「そうじゃなくて…精神的にもきついですよ!!」

その時、一体のサイエンサーがガギグゲゴの背後に回り、その爪を向けた。だが、彼はその身を葬られはしなかった。予定外の援軍が入ったのだ。

「あ、あなたは…レニウマン!?!」

そう、ザ・ルーラーの一員、レニウマンである。レニウマンは、自分の体より大きな敵を、自分の巨大な爪で貫いた。

「サイエンサーのことを一番よく知っているのは…私たち、サイエンサーなのです。地球がだめになるかもしれない…やってみる価値はあると思います。だから…不変薬のテストを行ったアメシス基地内のサイエンサーの中で、唯一『特殊能力』のせいで効き目がなかった私が、やらなければならぬのです。」

説明するレニウマンは、それでも戦っている。そんな中、ガギグゲゴによじ登りコックピットに近づいてきている者がいた。先ほど戦闘から離脱した廉と、基地から来たドッセルゲンガーだ。

「博士、廉、基地に戻ってないと…」

「いや、お前に…司令官直々の命令があるんだよ！」

「命令？」

コックピットを開けながら、次郎は返す。3人入るとなると少々きつくなるが、操縦に支障は出ない。

「次郎、アメリカに行くんだ。」

「え？アメリカですか？」

「ああ、そうだ。その国のNASAってところに行つて…宇宙に出るんだよ！やつらを…説得させるためになー！」

急すぎる彼の言動だが、ためらっている時間はない。短い時間でよく考えた上で、それを承諾する。

「じゃ、じゃあ、一応は外国なんですから、通訳を二人ほど連れて行つてかまいませんよね？」

「好きにしてくれ。あの宇宙人を…追い出せばいいんだ！」

それを聞いて安心した次郎は、すぐにガギグゲゴを移動させた。消えていくガギグゲゴを確認して、レニウマンは叫ぶ。仲間を呼んでいるのだ。

「頑張ってくれ…それまで、私たちがこの星を守る。…守ってみせる。宇宙人ごときに、地球の民のすべてを…盗られる訳にはいかない！！！」

第六話 宇宙へ

「ここが…あのNASAか…」

次郎ら3人の対サイエンサー組織隊員の少年は、その建物内の機械等に見とれていた。

「わざわざイギリスから飛んできた甲斐があつたな。」

その中で一人、イギリス人の少年が感想を述べた。

「それにしても、別に俺を呼ばなくてもよかつたんじゃないか？」

「いや…宇宙に出るとなると、きつと交渉に不要な『戦闘』が起るはずだ。だから、できるだけ強い…頼れる仲間がいてほしかったんだ。」

「で、今ここにいるわけか。」

そこに、もう一人、日本人ではない若い男が歩いてきた。

「あれ？アンモニウマン、博士は？」

「機体のシャトルへの搬入を手伝っている。ガギグゲゴ二機にギヤギユギョ・N、例の新型。そして、RCからギヤギユギョが届けるはずだからそれも運ぶ。けっこう乗せるからな、あと2時間はかりそうだ。それが終わったら、さつさと上がるう。」

「けっこう簡単に行けちゃうもんですね。」

「裏の人間だからな、私たちは。それに…」

アンモニウマンは言った。

「早く飛び立つたやつらを説得しなければ…いずれは地球は終わりを迎える。こうしている間にも、世界中でパイロットとサイエンサーたちが戦ってくれているんだ。それを無駄にしないために…行くんだ。無限に広がる大宇宙にな。」

S・07出発まで、残り30分。搭乗員は待機を続ける。

放送がシャトル内にこだまする。いくつもの馬鹿でかいメカを乗せたこの宇宙船は、同じく馬鹿でかいものになっている。

「宇宙か…行っても大丈夫ですよね？」

「どういう意味だ？」

船内での次郎の質問に、ドッペルゲンガーは答える。

「ほら、健康状態とか。一応は検査はしましたが、どうも心配で。

僕ら一般市民にとっては未知の世界でしょ、宇宙空間って。」

「大丈夫だ。ちゃんと向こうで管理してくれるさ。その分野については俺は詳しくないがな。」

その時、NASAの担当員と最後の調整をしていたアンモニウマ
ンが、どたどたとシャトルに入ってきた。

「何かあつたんですか？そんなに急いで。」

「シャトルの発射を止める！大変な事になっている！宇宙人が…サ
イエンサーがこっちに向かっているんだ！！！」

「ヒューストン（NASAがある都市）の隊員はなにをやっている
！？」

同じく、NASAの施設内

「あつちもあつちで疲れ果てているんです。あまりに多い敵のせい
で、夜通し戦い続けているんですから。」

「…なら、シャトルの発射を止められんのか！？」

「無茶な…シャトルにはありつたけの燃料、それも上がり活動する
ために最低限必要な分を入れてあるのです。…少しでも無駄には出
来ません。」

「次郎、どうする？」

張り詰めた空気が、シャトル内を漂う。

「30分か…それくらいあれば、なんとか戦えます。出撃させてく
ださい。」

「ゴッドは使えんぞ。ありや戦闘後の分解にやったら時間が要る。」

かといつて、あの姿で入れられちゃあまずいことになるからな。となると、ガギグゲゴのみでの出撃か…。」

「そんなら俺も行かせてくれ。」
「拳手したのはジョンである。」

「少しは加勢になるだろ？」

「ああ…では、頼んだぞ。いいか、絶対に時間内に戻って来い。」

「分かってるって。な、次郎。」

「はい。」

二人はその場を離れた。廉も出願しようと思ったが、それは実行しなかった。ただやりたくなかった、のではなく、もし二人が間に合わなかった場合にもどの道シャトルは発射、宇宙に向かうので、その時に誰もパイロットが残っていないと無駄になってしまう、と考えたからだ。その原則を振り払えば、もちろん一緒に行つて戦いたかつたのである。

「うおー!!!」

機械の巨人と、それより小さめの巨人は、迫ってくる怪物と体を押し合っていた。

「ジョン、このままでは時間が無い！このままではシャトルが!!!」
「放つておいたら、そのシャトルが危ないんだ！倒すしかないだろ!!!」

次郎は状況を把握しながら、対応に悩む。

（やつぱり、ゴッド・ガギグゲゴか…もつと長い時間をかけて戦わないと、勝つなんて無理だ。でも勝とうとして必殺技を最大出力でやるとなると、それもまた時間がかかるし…シャトルまで移動するのに使うエネルギーも不足してしまう。どうすれば…）

その時、次郎は何かを思いついた。自分たちの運に賭けて、次郎は言った。

「ジョン、僕にいい考えがある。」

「博士、先輩とジョンさんが！」

廉に叫ばれ、ドッペルゲンガーは外の様子を確認した。

「あいつら…何やってんだ!？」

ガギグゲゴとギャギユギヨ・Nは、どんどんシャトルの位置から離れて行ってるのだ。依然、NASAの敷地内だが、彼らの居場所は今のところだと、別の置いてあるだけのシャトルがあるところへ動いている。

「あの距離、大丈夫なんですか!？」

「なんとかもつと思うのだが…あつ!!！」

ドッペルゲンガーの声で、再び廉は光景を見る。2機は、なにやらGブラストと守妬頼苦・刃亜棲賭の発射体勢に入っているようだが、いつものその技とは何かが違うていた。それが意味するものは、廉にも分かった。

「出力を最大にしようとしています!!！」

「なananannなんだあいつら…諦めたのか!？」

だがその瞬間、シャトルは動き始めた。

「ジョン、そつちは?」

「OK、準備完了だ。」

動きながら連れてきた宇宙より来たし怪物は、その気味の悪い姿を一步前へ戻した。というより、ガギグゲゴとギャギユギヨ・Nに無理矢理押されたのである。シャトルの離陸がやや小さく見えた頃、二人の少年は言葉を発した。

「Gブラスト!!！」

「守妬頼苦・刃亜棲賭!!！」

「とうとう間に合わなかったか…。…ん!？」

ドッペルゲンガーが一度悲しい表情を見せたが、それはすぐに一

変した。二つの光が怪物の体を貫通し、それは爆発した。が、それと同時に、近くにあった別のシャトルも炎に巻き込まれ、大爆発を起こしたのだ。2機はその爆風に乗って、言葉では表せないような勢いで飛んできた。最大出力の攻撃をくりだしたせいで、空っぽになったエネルギータンクなど、お構い無しに。

「…ようやくしてくれるぜ、あいつらは。」

「…ですね。僕も仲間入りできなくて残念ですけど。」

そして、シャトルの速度をも越してるであろうその速さのおかげで、無事このシャトルに乗ることが出来たのであった。次郎はそれが成功したすぐ後、ジョンに話しかけた。

「これぐらい許してくれるよね、NASAは。」

「そうなることを祈ろう。俺達がこれからやる…大仕事に免じてな。」

第七話 侵略者の諸事情

「君たちが…例の地球からの使者か。よく来てくれた。」

無事宇宙ステーションに到着したシャトルとその乗組員たちは、暖かく出迎えられた。慣れない無重力に体を引きずられながら、着いてすぐに次郎は質問をする。

「ここ…アメシストに関係のある場所なんですか？ほら、僕ら組織って、宇宙はまったく関係なかったと思うのですが。」

「いいところに気がついたな。」

リーダー格の男は、なぜか荒れ気味のステーション内を見渡しながら、答えた。

「何年前か前、衛星から地球の拡大映像を撮り、その中でサエイサーの発生をいち早く確認する、という大変便利な計画が出されてね。」

そのために、元々は民間のものだったこれを我々が頂いたんだ。でも、つい最近…この戦いが終わってしまったね。実行直前だったよ。」

それを耳にし、なんともいえない気分で、次郎は軽く謝った。そんな彼を見ながら、男は苦笑して言う。

「いいんだよ、それぐらい。結果的には、すばらしい出来事となったんだ。ま、こっちはこっちで、また手放すからそのための工事でいろいろと忙しいけど。」

そこに、二人の男が体を浮かばせてやって来た。

「本ステーション内、特に異常なしであります。」

「ああ、分かった。」

「あと司令、かなり都合のいいものを発見しました。これを見ておいてください。」

簡単な報告をした後、二人は去っていった。その後で、彼は付け加えた。

「二人は、このステーション内で働いている、ヤマトとソウリンだ。」

割と後に来たから、まだまだ新米でね。ただ、昔メカ関係の仕事を担当していたらしいから、そっちの技術にはかなり強い。それと、紹介遅れたけど…私はここで司令官を務めている、バックドラフト小野だ。」

「…え？」

廉以外の4人が、目を丸くした。

「あの、もしかして…兄弟とかいます？」

「…いたような気がするな。何年も宇宙にいるから、家族のことなんて覚えてないが。」

「何の話ですか？」

「続編から出てくるお前には分からんさ。今度、作者のブログでも覗いてこい。」

バックドラフトは、先ほどヤマトから渡された書類に、目を通した。

「うむ…これで問題はないな。」

「何かあったんですか？」

「これからあるようだ。」

彼は、すぐにステーションのメインルームに行くように指示した。宇宙人から…情報が得られそうだ。この戦いに必要なものがな。」

「これがそうか？」

「はい。」

モニターが立ち並ぶその空間で、バックドラフトは二人の彼の部下に、情報を問うた。レーダー等の機器で確認できる限りでは、その物体はステーションからあまり遠くは無い位置にある。

「奇妙ですね…一機だけ残っているなんて。」

「畏だという可能性もあるな。」

「でも、始めないことには始まりませんよ。この円盤を鹵獲、中

の乗組員からいり色聞き出さないと。こんな機会は逃せませんよ。他ののは全部、行ってしまっただけですから。」

そのセリフに、次郎は一瞬驚いた。

「行ってしまっただけ…じゃあ、このUFOが残ってなければ、どうしていたつもりなんですか？」

「大丈夫でありますよ。どんなに高速で進んでも、記録には残りません。それを元に、進んだ方向などを計算すれば、ゴオカムとかいう星がどこにあるかは分かりますから。」

「…つまり、ゴオカムに向かうと？」

「どっちみちそうなると思います。」

数十分後、機材を積み万全の体制で、シャトルは円盤へと向かった。

「ありがとうございます。」

割とあっさり捕らえられた一人の宇宙人は、ステーションでそんな言葉を言っていた。もちろん日本語である。

「何のつもりでの感謝の言葉だ？」

「実は、私が操縦していた船が故障してしまっただけ…本艦隊から置いてきぼりされてしまった次第です。私一人だけで幸いでしたよ。」

「侵略者のくせに情けないな、これでは。」

バックドラフトはそう言った後、重くこう聞いた。

「今の状況を見ると分かると思うのだが、君に出来る限りの協力をしてもらう。大丈夫だ、捕虜だからといって悪い扱いはしない。大事なデータバンクだからな。で、そうしてもらう方がいいかね？」

「ええ、もちろんいいですよ。」

この質問に返ってくる答えは、必ず同じものになることは明確だった。敵の宇宙基地にたった一人で捕らえられているのだ、仕方が無い。だが、彼の言葉にかかった感情は、あまりにも『素直』の一言すぎた。

「君は…本当に侵略者なのか？その態度で？」

男の疑問に、これまた素直に彼は答えた。

「…私たちゴオカムに住む者は…みな優しいのですよ。」

「それ、『自意識過剰』っていうやつか？」

ジョンが思わず口を挟んだ。

「違いますよ。ある学者が理論的に言うには、知能のある生物が存在した場合、必ず『争い』というものが生まれる、と。しかし、どんなにゴオカムの歴史を調べても、それに似た出来事は起こっていないのです。その理論を正そうとたくさんの人たちが調査した結果、我々は皆憎しみや怒りをあまり持たない優しい心を持つ生物なのだ、断言されたのです。」

それを聞いてから、5人ばかりは目を見合わせた。数名が話している中で、アンモニウマンが鋭く言った。

「では君たちゴオカムの、君を含めた…この地球では『人間』と呼ばれている生物は全て優しい心の持ち主だ。だから、生まれてくる子孫も同じで、それが繰り返されて今に繋がっている、ということか。全ての理由が説けたわけではない、が。」

「はい、そうなのです。」

「ならあの怪物はなんなんだ？」

彼が言ったことで、宇宙人は固まった。

「我々は、既にその生物は知っていてな。ゴオカムとやらにも住んでいるのだろうか？どのような形でなのかは分からないが。彼らに生殖機能はなく、化学変化によって生まれる。つまり、親がどうかではなく、完全オリジナルで生まれてくるのだ。それも全て優しいのか？」

「その通りです。そりゃあ、生まれてきてすぐには凶暴なものがほとんどです。でも、育つ環境を考えてみてください。どっちを向いても統一した性格。その生物だって同じようになっておかしくあり

「ませんよ。」

「…フツ、なるほどな。」

そこでアンモニウマンは、質問を変えてみた。

「なら…その生物が、なぜこのような計画を立ち上げたのだ？」

「…できればやりたくはないのです。でも、わが星を危機から守るため…みんな一生懸命なのです。将軍が発案してくださったのですし。」

「将軍？」

「あまりお目にかからないのでよく知らないのですが…ゴオカムで一番支持があり、星全体を統制してくださっているすばらしいお方です。詳しくは、後でじっくり話しますから。」

そのタイミングで、次郎は口を開いた。

「ねえ…あの怪物は、一体なんなのさ？」

「フィジッカーと呼ばれるものです。知っているのでしょうか？」

「地球のものは、能力の高さが遥に違っていった。それがどうしてか、できれば知りたいんだ。」

それに対し、彼は間を置いてから、言いにくそうに答えた。

「…彼らは、『完璧』を目的に『飼育』されたフィジッカー…『Pタイプ』の失敗作です。」

第八話 そこは最悪のフィールド

「完璧に飼育？ どういうこと？」

訳が分からなくなつた次郎は、彼に説明を要求する。

「…過去のデータから計算されたものを使って、睡眠時間から一日の食物摂取量、筋肉への刺激まで全てを管理し、文字通り『完璧なフィジッカー』を作っているのです。もちろん、なにもかもが完全体、フィジッカー自体が元々持っている能力を最大まで引き出すことが可能であり、それを生かせば我々の大きな戦力になると考えているわけです。」

「…なら、『失敗作』ってのは・・・？」

「データの中のわずかなミスのせいで、『完全』ではなくなつたものを今回あなたの方の星に投下しました。実験を試みた、従来のものより優れているフィジッカーに変わりはありませんからね。しかしどんなに研究を進めても…今まで一度しか成功していません。」

「成功したのか？」

「はい。したことはしたのですが…当時はきちんと『頭脳』というものも含めて行っていたために、思考を持ったせいかな暴走、死んでしまいました。」

「だから、それ以後はおつむなんざ無視して…言葉も口に出来ないあのバケモノにしたのか。」

「そうですね。しかしその部分を省いたおかげで、体の方はより向上しました。」

「ああいう敵さんでこっちは楽でいいよ。」

船内でまだ事情聴取は続けられているが、バックドラフトと地球からの部隊の人たちは、一息ついていた。

「惑星ゴオカムねえ…デネボラを恒星としている、公転しない星か。どうりで我々が存在に気付かないわけだ。デネボラといえば、しし

座の尾だな。略してしし…」

「地球からの距離は36光年と、かなり近い方で良かったであります。」

「たしかにな。まあ遠くても近くても、あいつが乗ってきたUFOの機械を使わせてもらえば、ゴオカムには必ず着くはずだ。」

「ゴオカム…想像が付きませんね。」

「なにしろ36光年しか…いや、36光年も距離があるんだからな。」

「そつえば、よく考えてみれば、そつちの星から見える地球って36年前の地球ですよ？上手くいけばマニアックなアニメと見れますよ！」

「くだらないこと考えているんじゃない。」

「冗談ですよ。」

上司に怒鳴られ、ソウリンはしぶしぶモニターに目を移した。

「そついう油断が死に繋がるんだ。なにか変なものでも見えるか？」

「見えませんよ。ただ、巨大な円盤が数機近づいているだけです。」

「…何だつて!？」

「戦闘準備ですか？」

その不吉な報告は、すぐに次郎らの耳に伝わった。

「宇宙での戦闘なんて初めてですよ。」

「だろうな。」

「流さないで下さい。問題ないんですか、無重力下で戦うなんて。」

「大丈夫だ。ガギグゲゴにジェットも装着してある。あとは、それに慣れればいいだけだ。」

「山田次郎、ガギグゲゴ、出撃します!!!」

ステーションと連結されているシャトルから、ぬんと巨人が立ち

上がった。さすがに初めてのため、カタパルト等で勢いよく射出、という訳には行かない。

「次郎、濟まないな。状況が確認できたら、廉とジヨンも出させる。」

「分かりました。」

ガギグゲゴは、宇宙船から身を乗り出した。念のためにとスリムな宇宙服を着た次郎の周りでは、小物が宙に浮かんでいる。なんともいえない不思議な感覚の中で、慎重に次郎は敵の姿を見つけた。

「…なんだありゃ？」

こちらに向かってきているのは、5体のフィジッカーである。この数にも驚いたが、次郎の一番の関心は他のところにあった。

「…たしかに…昔のアニメじゃないんだから、空気の無い宇宙空間でそのまま空気が必要な生物が漂っている訳無いんだけど…顔にボンベ装着されちゃあなあ…」

呆れている途中で、既に怪物の一体が突進してきた。ガギグゲゴは体をくねらせ、それを避けた。だがその直後、ガギグゲゴは体を動かしたせいで、慣性の法則にしたがってそのまま回転したのであった。

「目、目が…」

気持ち悪くなった次郎は仕方が無く、回転を止めようとガギグゲゴを適当に動かす。すると今度は、反対の方向に回転した。

「こ、これが宇宙なのか…宇宙の神秘なのか!？」

それを何回か繰り返し返しているが、一向に静止しない機体、そして構わず進んでくるフィジッカーに、これまでか、と思ったその時、危機は無事収まった。

「先輩、大丈夫ですか？」

「廉か…よく来てくれたな。助かったよ。」

援軍のおかげで、ようやく次郎は体勢を立ち直した。反撃に入る。「博士、ギャギユギヨを自動操縦で出してください。これあの怪物共も少しは…」

「いや次郎…無理だ。」

「すまん…」

「いやすまんじゃなくて…なんでダメなんですか!？」

話しながら、次郎は迫るフィジッカーをあまり効き目がないGブラストで対処した。廉も同じく、防衛線を築いている。

「次郎、ここは無重力だ。地球とは違う。ガギグゲゴはジェットのおかげでなんとかなってるが…ギャグユギヨにはまだそれが着いていない。慣性が働いたため、このままでは地球上と同じ連結は限りなく不可能だ。」

「なら、ゴツドを!!」

「右に同じ…改造してないんだな、これが。」

「じゃ、じゃあ、これから先どうするんですか!？今は!？」

「後でジェットを着ければいいだろ。今は…どうすつか。」

「早くしてください!!15で死にたくないですよ!!それも宇宙でなんて!!」

「…よし、あの手がある。2時の方向だ。」

ドッペルゲンガーに言われ、次郎はそれをモニター越しに見る。

そこにあつたのは、人工衛星の残骸からなる『宇宙ゴミ』であつた。ほぼ動かない状態で止まっている。

「…これ…どうしろと?」

「それぐらい分からないのか?奥に、Gバスターみたいな形の細長い残骸があるだろ。それを使え。」

「使えつて…」

「大丈夫だ。お前ならできる。」

そこで、通信は途絶えた。博士が独断で切ったようだ。

「うおー!!」

ガギグゲゴは腕に装備された新兵器、という名の宇宙ゴミを振り下ろした。相手は衝撃に弱いのか、頭上に当たった瞬間、粉碎された。

「先輩、強いですね。まさかこんな戦い方があるなんて知りませんでしたよ。」

「他人事だと思って…少しはこつちのことも考える…！」

次郎は再び、攻撃をした。見る見るうちに消えていく敵。だが、腕を動かすスピードにエネルギーを使いすぎたのか、燃料もあとわずかだ。最後の力を振り絞り、残りのフィジッカーに一気に棒を当てた。

「出軀乃棒・煩齒阿！！！」
デクノボウ・ボンバー

リズムよく爆発するフィジッカーを見ながら、次郎は体を休めた。「ああ…もうやだ。宇宙なんてこりごりだ。早く終わらせて…みんなで帰ろう。僕らの母なる星、地球に。」

第九話 地球、危機一髪（前書き）

ガギゲゴ（出駆乃棒カスタム）画像 URL
http://blogs.yahoo.co.jp/eienn
niyakkaimonno/4245469.html

第九話 地球、危機一髪

「よう、お疲れさん。」

「死ぬとこでしたよ。博士、ああいうことは出撃前にちゃんと言っておいてください。」

「気をつけるよ。」

無事、廉と次郎はステーションへと帰還した。裏で二人を支えていたジョンも戻ってくる。3人が話していると、バックドラフトが出迎えてきた。

「お取り込み中、悪いが…新たな任務が生まれたようだ。」

「敵襲ですか？」

「それより厄介なものだ。」

「任務は…しくじったようだな。」

同じ頃、ゴオカムの宇宙船では通信が行われていた。

「申し訳ありません。しかし…やつらは、対フィジッカーの兵器を所有していました。これにはどうにも…」

「言い訳は聞きたくないな、ビアオ少将。まあいい、手をうつ余裕ならある。彼らがゴオカムにたどり着いたとしても、な。今は…私はその地球とやらに向かっている。」

「あの星に…ですか？」

その時、ゴオカムに向かうこの円盤のすぐ近くを、別の船が横切った。おそらくは、通信の相手に乗っているものだろう。

「一仕事あつてな。終わったらすぐに戻る。星の民もそれを待ち望んでいる事であろう。」

「承知しました。くれぐれも、注意してください。あの星はまだまだ未知でございます。」

「分かっているさ。伊達に將軍をやっているのではなくてな。」

「つまり…隕石を止める、と？」

次郎は頭を傾けながら質問した。

「隕石じゃなくてフィジッカーだろ？」

「今は似たようなものだろ。」

司令官は改めて説明をする。

「君たちが倒してくれた怪物の残骸だが…どうも計算してみると、このままではそれが地球の引力に引かれて、そのままバーン、ってことになってしまうようだ。」

「おまけにフィジッカー、すなわちサイエンサーはその体の構造上、熱に強い。細胞は死んだとしても、いくつかが形が残っている。地球では爆発して木っ端微塵になっていたところだが、どうも宇宙という環境とは相性が悪いらしいんだ。」

アンモニウマンはそう付け加え、そして任務を率直に伝えた。

「どうにかして…それを防いでくれ。」

「燃え尽きないもんなんでしょうかね？」

「そうなってほしいところだよ。」

シャトルを出発した機械人形たちは、真っ先に灰色の物体へと進んだ。

「一番簡単なのは、軌道をずらすことだ。だが大きさが大きさだからな。」

「でしようね…やれることはやってみますよ。」

すぐに、その塊はすぐ近くにやってきた。次郎はガギグゲゴをそれに押し付け、力を加えた。しかし相手は地球の引力、それも簡単には動かない。それどころか、どんどん加速している。

「次郎、こつちも無理っばい。俺の機体は小さいからな。」

「同じく、僕もどうにもなりません。」

「ったく…そうだ、攻撃をすればいいんじゃないの？それで小さく

すれば、少しは押せるはずだ！」

早速、3人は運に賭けそれを実行に移した。

「Gプラスチック!!!(x2)」

「守妬頼苦・刃亜棲賭!!」

光は輝きを発し、物体に貫通した。幸運にもそれぞれの残骸は予想した通りに少しばかり小さくなり、これで問題解決だな、と思えた。が…。

「うそお!?!」

爆発で軌道がわずかにずれた3つの塊はぶつかり、一つの巨大な塊となったのだ。

「なな何が起きた!?!」

「フィジッকারの粘着力がある肌のせい、お互いにくっ付いたんだ!」

「どうするんですか、これ!?!」

「どうするって…小野さん!!」

次郎はすぐに通信回路を開き、モニターに男を映した。

「まったく、大変なことをしてくれたな。」

「仕方なかったんですよ!とにかく、どうすればいいんですか!?!」

「まずは、物体を少しずつでも小さく砕け。」

「分かりました…早…」

その時、次郎はコックピット内の空気が暖かくなっているのを感じた。既に、機体は地球の大気圏スレスレのところにあつたのだ。モニターからは、同じように赤くなったコピー・ガギグゲゴとギヤギユギョ・Nが見えた。これでは塊を砕きようがない。時間もあと残りわずかのようだ。

「このままでは…地球に…」

「次郎、命令を伝える。隕石は…物体は、地球に落とすんだ。大丈夫、被害はそれほど大きくはならない。この際だ、やっつけてくれ!」

「結局、落としていいのか？」

「何処に落としましょうか？角度とかを変えれば、候補はたくさんできますよ。」

一番負荷の大きい位置にある次郎が考え込んでいる中で、二人は彼をおいという話を先へと進める。

「インドなんかどうだ？」

「いやだめですよ。カレーの聖地ですから。」

「ロシアは？あそこなら誰も文句言わないと思うんだが。」

「私の居場所を奪う気か？」

「RCさん！？どこから入ってきたんですか！？」

「じゃあ…先輩は何処が良いと思いますか？…アフリカとか、南アメリカとかですかね？」

廉に振られ、次郎は怒鳴り口調で答え、ガギゲゴの最大出力で動かした。

「おまいらなあ…海があるだろおおおおお！！！」

同時刻、某都市では。

「まったく…一眠りしていたら、こんなことにな。」

レイクは基地を飛び出し、荒れ果てた市街地に来ていた。目の前には、ぶつかり合うサイエンサーとサイエンサーが見えた。まだ夢を見ているような感覚で、レイクは歩き続けた。すると、UFOといえるものが降下、着陸してきたのだ。そして出てきたのは人間だった。服装はいかにも偉そうだ。

「…何者だ？」

レイクの疑問に宇宙人らしき人物は答える。それにより様々な謎も生まれたが、特に気にする彼ではなかった。

「聞いてないのか？」

「ああ、聞いてないとも。ただ…いい雰囲気ではなさそうだな。私も似たようなものだが。」

「似たようなもの？」

「悪い男でな。多大の罪を犯してきた。」

それを聞き、一瞬考える姿を見せてから、宇宙人はこう言った。
「私と…手を組まないか？」

「司令官。」

「船では船長と呼べ。」

数時間後。ステーションに備え付けてあった大型の宇宙船内で、彼は報告を受けた。

「地球から文章通信が届いています。」

「読んでいる時間はない。今は…ゴオカムを目指して、この船を出発させるのみだ。」

第十話 バリケード・ピアオ

「ひとまず、一件落着つてとこだな。出発したところで、また生きて帰れる確率がぐーんと減っちゃったけど。」

3人のパイロットは腰をおろした。

「で、獅子の尾までどのくらいかかるんだ？」

ドッペルゲンガーは、宇宙船『ビ・ダクオン』の操縦席から入ってきたアンモニウマンに尋ねた。

「36光年、距離に直すと340兆kmあまり。」

「…それって、フルマラソンより長いのか？」

「もちろんだ。だが、ゴオカムのすばらしい技術のおかげで…3日ほどもあれば着くようだ。着いたらすぐに、その星の政府とかと交渉、説得させるのみだ。それが無理なら、ビ・ダクオンに備え付けである武器で攻撃するしかない。」

「え？」

アンモニウマンの言葉に、次郎は戸惑う。

「場合によっては…そうしなければいなくなる。政府の者、もしくは情報のつまった建物の機械などを壊せば、ゴオカムはパニックに陥り、侵略どころじゃなくなるはずだ。」

「彼らすべてが悪いの？そんなの…なんか悪いよ。」

「分かっているさ。だが、悪くないのは我々も同じだ。守らなければ、奪われる。そのためには、手段を選ばない。いや…選べない。」

「ヤマト、宇宙人から新しい情報は掴めたか？」

「もう無理ですよ。」

バックドラフトは、ヤマトなる若い隊員に声をかけた。

「フィジッカーのことを話して以来、全然口を開かなくて。」

「どういうことだ？」

「さあ。これ以上の重要な情報は知らないのか…はたまた、地球強

奪計画とかいうのを乱していることに気付いたのか。」

「まあいいさ…ゴオカムにたどり着きさえすれば、後はこっちのもんだ。」

バックドラフトは、あることに思いつく。

「そうだ、出発時に地球から通信が届いている、って言ってただろ？見せてくれ。」

ヤマトは急いで、最寄のモニターにその文章を開いた。

「レイク…ザーズ？あの大洪水計画を建てた？なぜNASAから通信を？」

そうは言つが、彼は一通り目を通した。だが、その内容は…。

「…嘘だろ…」

しかし考えている間もなく、別の出来事が起こった。ゴオカムの宇宙船が出現したのだ。

「少将、こんなことしていいのですか？」

円盤を操るエズーは、ビアオの顔を見つめる。

「將軍の命令に反していますよ。」

「そんなことはどうでもいい…地球で犯した失態を、このまま放っておいていいのか！？ここで手柄をとれば、將軍もお喜びになるはずだ。君の階級だって上がる。それが気に入らないとは言わせないぞ。」

ビアオは、目の前の敵に顔を向けた。

「さあ…かかって来い、地球人！！」

「まったく、宇宙人も懲りないな。」

「お互い頑張ってるんですから。」

ジェットで位置を決め、ガギグゲゴは宇宙船へと進んだ。

「エゾー、TPタイプ（Pタイプの失敗作）を出せ。…船に積んである、『全て』な。」

一方、UFO内では。ピアオの命令に彼は反論する。

「何言ってるんですか!？」

「私は正気だ。だからこそ、この戦いの火蓋を切ったのだぞ。」

「いやしかし…船に積んだ残りのフィジッカーは、将軍が科学者である少将に、『無断で使用しない』ということを経済に与えてくださったもので…」

「やかましい!早く…早くしろ!！」

「早く片付けて…ん!？」

次郎は、モニターに映る光景を目にした。そこには、50体にも及ぶ怪物が。

「ちよ、あんな数聞いてないよ!！」

次郎はとつさに通信回線を開く。

「GゼウスとGデメウスの改良はまだ済んでないんですか!？」

「今も突貫でやってるが、まだまだかかりそうだ。」

「じゃあギャギユギョ!！」

「もう少し待ってくれ…あと少しだ。それまで、ガギグゲゴのみで辛抱してくれ!！」

選択肢はないと分かり、次郎はガギグゲゴを止めはしなかった。

「Gブラスト!！」

2体のガギグゲゴとギャギユギョ・Nは、しばらくの間はそれぞれの必殺技で少しずつ敵を消していった。だが、パイロットの疲労もあり、生死の境目は時間の問題であった。

「先輩…もう、くたくたです…」

「俺もだ次郎…もはや、避けているだけで汗がどばどば出てくるぜ…」

「二人とも、なんとかかしてくれ!!」

助言している次郎も、今はジョンと廉とあまり変わらない状況である。

「くそ…力が…」

意識がもうろうとしたその時、背後から近づいてきたのは1体のフィジッカー。うめき声を上げながら、爪を向けた。次郎は目をつぶった。そして、入ってきたのは、ギャギュギョだった。

「次郎、ギャギュギョはもう使えるぞ!!」

「博士!?なんで乗ってるんですか!?!」

「全自動で助けるのは少々不安でな!!」

「そういう問題じゃなくて…ま、いつか。」

すると、次郎はみるみる内に精神と肉体が回復していった。

「よし…起死回生だ!!博士、しっかり掴まっててください!!」

「つ、掴まっている?どういう意…」

ガギグゲゴはギャギュギョとドッキングし、紅い閃光が放たれた。敵の間近で、剣を振り下ろす。剣はフィジッカーを一刀両断した。

「雷斗忍愚・舞零怒!!」

「次郎おおおお…目がああああああ…!!」

腕を動かすたびに響くドッペルゲンガーの悲鳴が耳障りだが、爽快に次郎は攻撃をしていく。

「後のことを考えずに、ギャギュギョに乗ってくるのが悪いんですよ。ここは、生き抜くための代償として踏ん張ってください。最後、いきますよ。」

ガギグゲゴは一気に、2体のフィジッカーを破壊した。その爆風に覆われ、連鎖を起こすように艦隊も爆発したのであった。慣性でガギグゲゴが動いているが、次郎はそんなことを気にもしない。運命が大きく揺らぐ、次の瞬間までは。

「ふう、終わった。シャトルへ戻るか…!？」

「船長、部隊が帰還したようであります。」

「うむ。」

バックドラフトは、宇宙船のハッチを開いた。同時に、そこへ足を運んだ。そこで彼は、大きな異変に気付く。

「ガギグゲゴが…1機足りなくないか？」

バックドラフトの素朴であり重要な疑問に、ドッペルゲンガーは顔をうつむかせて答えた。

「すまん…。ガギグゲゴは…次郎は…宇宙に…消えたんだ。」

第十一話 消えた主人公

およそ5分前のことである。

「くっ…なんてこった…」

「おい次郎、どうした？」

回転するガギグゲゴは、どんどん船や別の巨人のある空域から離れていく。目眩を抑えながらドツペルゲンガーはどうかして状況を確認しようと努力した。だが次の瞬間、ギャギユギヨはガギグゲゴとの連結が解除され、ガギグゲゴのみがゆらゆらと動いていく。

「おいおい、どこに行く気だ！」

「博士…船に戻っててください。僕は、大丈夫です。」

異どこか様子がおかしいのは彼もわかっていた。だから、ギャギユギヨは小さな体でガギグゲゴを押さえつけ、静止させようとする。だがその大小の差、最後まで巨人を止めることは出来なかった。

「どうしようもなかったんだ…なぜだかはまだよく分からない。俺だって精一杯、次郎を助けようとした。それでも…」

「もういい、ドツペルゲンガー。それに、まだ彼の運命が決まったわけではないはずだ。」

バックドラフトはそう言いながら、頭上を見上げた。分厚いガラスごしに、無限の宇宙が見える。

「ジョン、廉、次郎の二の舞にならない程度の範囲で、彼の搜索をしてくれ。今のうちなら可能性はある。できるよな？」

「はい！」

「そして博士は…ちょっと話し合いに参加してもらいたい。」

「レイク・ザースから？」

「ああ。」

二人の少年が宇宙へと出た後、アパルトヘイトはそれを見せた。

「NASAからの通信だ。なぜその場所にいたのかは不明なのだが……」

「どうも信用ならないな、俺は。」

「好きにしてくれていい。しかし彼が我々に施してくれた情報によって、全てが変わってくるかもしれないんだ。」

ドッペルゲンガーは真剣な赴きのバックドラフトを見て、ようやく口を閉じ聞く姿勢に入った。彼は内容を説明し始める。

「レイクが言うは、某都市で…宇宙人の話を立ち聞きしたらしい。それも、特に階級の高そうな奴の会話を。そして、彼は知ったんだ。ゴオカムは今、この星の生物を皆殺しできるほどの兵器を所持していることを。」

「おい次郎、応答してくれえー!!」

「先ばーい！何処にいるんですかー!!」

二人はポリウムを最大にして、機体から音声を出した。通信回路も全開にいしてあるが、次郎からの答えは帰ってこない。

「通信可能領域から出てしまったのか？」

「じゃ、じゃあ先輩は……」

「何言ってるんだ。どんなに離れていても…きっと、まだ生きているはずだ。その希望を捨てずに、搜索を続けようぜ。さあ、もう少し遠くへ行くぞ！」

ガギグゲゴとギャギユギヨは、暗い宇宙の奥底へと飛んでいった。

「なんだって？」

ドッペルゲンガーは大きく反応した。

「そんなの持っているなら、なぜまだ使っていない？」

「分からない。既に地球と通信はできないし、かといって今更引き返すなんて無茶だ。確めようがない。おそらく…こちらの様子を

見ているのだろう。人間は奴隷としても有効に使えるからな…最終手段として出してくるはずだ。」

「…で、その兵器があるとどうだったんだ？」

「分かるだろう？我々は敗北への道を歩むことになる。」

それを聞き、ドツペルゲンガーは気違いのように笑いだした。

「じゃなんだ？要するに…俺等地球人に未来はない、ってことか？この船がゴオカムにたどり着こうが、相手側の將軍とやらを抹殺させようが、その爆弾かなにかでおしまい。そういうことかくりやあ諦めるしかないな。」

「いや、違う。」

バックドラフトは固く断言した。ドツペルゲンガーは少しずつ正気を取り戻す。

「どうするってんだ？」

「その兵器を、爆破するのだ。」

「爆破？」

彼はモニターにビ・ダクオンの構造を表示させた。後方に、ビーム砲のようなものがついているのが分かる。大きさは船の数割かを占めているだろう。

「なにしろ、今まで争いのなかった星だ。地球とそこに住む邪魔者を発見してから初めて『兵器』というものの開発を شدした…故に、そほど万能ではない。使用までの準備に、たいそう時間がかかるらしい。」

バックドラフトはモニターを閉じた。

「到着が間に合えば…不意打ちをかけることができる。」

「それに成功した暁には、突然の奇襲に対処できなりその兵器は消滅、運がよければそれでこの船の本来の目標も果たせるかもしれない。今次郎の搜索を手伝っているアンモニウマンも、これに賛成し

てくれた。」

ドッペルゲンガーは悩んだ。そして、頭の中をよぎるものがあった。

「次郎ならこう言うはずだ。『悪くない者も犠牲になってしまつ』と。」

「承知してある。だがな、使われてからではもう遅いのだぞ。やられる前にやらなければ…失うのだ。」

その時、二人の戦士が戻ってきた。

「どう…だったか？」

二人は首を振った。答えは『No』のようだ。

「…大丈夫だ。必ずまた、何処かで会えるだろう。…任務、ご苦労だった。」

4人は、顔を見つめあった。この悲しい事実を忘れ去りたい、と強く思いながら。

「これで…よかったのか？」

「ああ。よくやってくれた。」

こちらは地球のNASA。レイクは謎の宇宙人に問いかけた。

「一体、何が目的なんだ？」

「この星が欲しいだけだ。なあと、協力者として君を残しておいてやろう。」

「そういうことではなく…私にとらせた行動についてだ。」

宇宙人は苦笑した。

「後になれば分かる。君が犯した大きな過ちと共にな。」

それからすぐ後に、彼は再び宇宙に飛び立ったのである。

「ここは…どこ…だ…。」

次郎はもがくような気分で呟いた。

ガギグゲゴの燃料がほとんど無くなっているのに気付いた時は、頭の中が真っ白になっていた。戦いに没頭しすぎて、エネルギーメ

「ターなど全く目に入っていなかったのが、一番のミスであった。一番気に入らないガギグゲゴの回転を止めようにも、首一つ動かない。自分はもう船には戻れない、そう確信した。それでも、ドツペルゲンガーだけでも逃がし希望へと繋げようと、奇跡的に生き残っていた腕の回路を使って、ギャギユギヨを切り離した。やがて声も聞こえなくなり、ガギグゲゴの回転のせいで意識を失った、というより眠ってしまったのだ。」

「何が…起こって…」

次郎はそつと目を開けた。最初に視界に飛び込んできたのは、一人の少年の姿だった。

「生きてるか、巨人のパイロットさん？」

第十二話 少年の行く先

「よかった…無事みたいだね。」

次郎は体を起こした。少年は言う。

「僕はミケイフ。…君は？」

「…僕の名は…山田次郎。ありがとう、助けてくれて。」

ミケイフは体の大きさから見て、鈴木廉少年よりは年下だろう。

地球人かというと、小学校高学年あたり。そしてここは、宇宙船の中らしい。それも、ゴオカム製の。しかし少年の瞳からは、地球で会ったビアオや、捕らわれの身になった名のない宇宙人なんかよりも『戦意』というものは感じ取れなかった。

「気が付いたようだね。」

向こうから、大人の男が近づいてきた。

「息子が、回転する人型の乗り物を発見してね。気になって船に格納し調べてみたら、君が乗っていたって言うわけだ。」

「その…巨人は？」

「船に置いてある。何もいじってないさ。面白いものを持ってるんだね、え？」

次郎は考え込んだ。どうやら、ここにいるゴオカムの人間は、自分が同じ星の者だと思っているようだった。利用する、という言い方は気に食わないが、それに似た意味のことをするしか道はなさそうだった。本当のことを言ってそれが自分の扱いにどう関わってくるか以前に、信じてもらえるとは限らない。それに、仲間との再会は難しそうだ。

「この船は…どこに向かっているんですか？」

「君がどこか用事があるなら、できるかぎりは手を貸すぞ。」

「いえ、構いません。」

「そうか…一応は、これはゴオカムに向けて進んでいる。」

「ゴオカム…ゴオカム!？」

次郎は驚く。

「そろそろ燃料も尽きるころだな。引越しの準備も済んでないんだ。」
「ジロウの家はもう終わったの？」

少年に尋ねられる次郎。ここで焦ってはいけないと、知っている情報を活用しながら彼はできるだけ自然な形に戻した。

「う、うん。大変だもんね、星を移るんだから。」

「まったくだ…まあ仕方がないからな。エネルギーが枯渇してしまつては、生命は生きられん。」

次郎は、めいっぱい情報を出し、ゴオカム星人に溶け込もうとした。

「この戦いも、早く終わるといいですね。」

だが、この一言が冒険の幕開けとなったのだ。

「戦い…だつて？何のことだ？」

「いやだつて、移る星の住民とゴオカムの人が…」
「住民？」

まだ幼いミケイフさえ、次郎の言葉にぼかんと口を開ける。

「聞いてないのか？我々が発見した植民地となる星には、知能を持ち好戦的な生命体など存在しない。」

「だから、あとは移り住むだけ、なんだよ。」

教えられ、次郎は悟った。

（ゴオカムの、一般市民には…地球強奪作戦のことなど、知らされてないんだ…！）

頭をかしげる二人を横目に、その理由もなんとなく浮かんできた。

（多分、より多くの人が事実を知ると…その性格から『侵略はいけない』という民衆運動が始まる。だから、真実を隠している…そういうことなのか…。）

「將軍閣下、あと一時間で到着となります。」

同じ頃、別のゴオカムの宇宙船では。

「速いな… よろしい。別に、そんなに急がなくてもよいのだぞ。」

「都合の悪い事はないはずです。」

「それもそうだな。」

將軍と呼ばれるその男は、深く座に腰掛けた。

「あと將軍…」

「何だ？」

唐突に、側近は話しかけた。

「例の件ですが…」

「ああ、あれね。もういいんだよ。手は打ってある。」

若き將軍は、笑いながら答えた。

「ゴオカムで一番の対宙防衛の兵器を操る権限は、どうあがこうと

も私の元には渡ってこないからな。」

「申し訳ございません。」

「いいんだよ。国民投票でも決まった事なんだ。なぜ兵器が、市民が管理するものであり私などの政府の人間が使ってはいけないか分かるか？支持されていても…裏では警戒しているのだよ。私たちがなにをするか、不安でな。」

側近は自分の力足らずの事実、頭を下げた。男は励ますような感じで言葉を述べる。

「気にすることではない。事実、もう手に入れたのと同じようなものだからな。」

「え？」

「具体的、そして率直に言えば…それにより、例の宇宙船を葬ることになる。」

「將軍…命令をご変更になった？」

「いや、違う。今まで通り、『敵が攻撃してきたら、迎撃しろ。』だ。」

その時、宇宙空間を映すモニターに小さい点が見えた。惑星ゴオカムだ。だが、日々見ているその星にコメントはない。彼は続ける。「うかつに『船が見えたら、すぐに攻撃しろ』なんて言えないからな。前、何回か言った事があったが…いつも返ってくる答えは異口同音だった。『一方的すぎる』、『相手が来た理由を知るべき』、そして『まだ悪いことはしていない』。こればかりはどうしようもできないのだな…ゴオカムの人間の性格では。私自身も、そんなのだが。」

彼は、はっきりとこう言った。

「やつらは、必ず先制攻撃を仕掛けてくるだろう。こちらが何もしなくても。」

「断言できるのですか？」

「できるとも。私には分かる。…というより…私が仕向けたのだ。」

嘘までついてな。」

「嘘？」

「知らなくていい。…全て、計画通りだ。枕を高くして眠れる日も、いずれは来るだろう。」

「このあたりの景色が好きでね。移住すると見れなくなるから、父さんと一緒に最後の観覧に出かけたんだ。」

ミケイフは今ここにいて経緯を次郎に話してくれた。

「普通の家庭ならたいはいはこういう宇宙船を持つてるけど、こんな使い方をするのは僕ん家ぐらいだよ。父さんはこういうのが大好きでね。」

彼は、話が聞こえていない父の姿を見つめた。船の操縦をしている。次郎は、次々と入ってくる新情報に巻き込まれながらも不自然にならない程度に質問をした。

「船を持つてるのに…なぜほとんどの人は外の世界に出ないのかな？」

「さあ。子供の僕はよく知らないけど、あの星が見つかる前、ゴオカムの問題でみんなが困っている時はよく宇宙に旅立っていたらしいよ。運がよければ、その、理想郷が見つかるかもしれないし。こつさりそれに成功して一人だけで星に住んでいる者がいる、つていう噂が出たぐらいだから。でも、その時だって船の数は決して多くはなかった。」

「なぜ？」

少年の疑問を、ミケイフは一言で返した。

「なんだかんだ言っても、みんな自分の星が好きなんだ。」

その直後、操縦者が歩いてきた。どうやら、もうすぐ着くらしい。ミケイフは窓を指す。

(これが…惑星ゴオカム…)

恒星の光で反射するその星は、地球に似ていた。海の青と陸の緑に満ち溢れた、敵とは思えない美しい星だった。

第十三話 異星探索期

「セプテンバーアアア・ナインティイイイイン!!」

ガギグゲゴの腕に付けられたビームの刃は、敵を真つ二つに切り裂いた。それを操っていたドツペルゲンガーが一息ついていると、廉から通信が入る。

「博士：今、なんと言いました？」

「あんま使ったことないから掛け声忘れちまってな。英語で10月19日って言ったんだ。これ、作者の誕生日だからよく覚えてくれ。」

「10月は『セプテンバー』じゃなくて『オクトーバー』です。」

「どっちでも一緒だろ。」

そこに、ジョンのギャグユギョ・Nが戻ってきた。

「こつちも殲滅完了だ。さ、船に帰還しよう。」

「了解しました。」

「おう。」

ロボット軍団は移動を始めた。その途中で、ドツペルゲンガーは呟いた。

「まったく…次郎がいないと、なにかと不便だな。今の戦闘だって、もう少し短縮されたはずなのによ。」

小声で言っただけだが、それが聞こえたらしく廉が言葉を返した。

「きっと、また会えます。その時を待ちましょう。」

「…そうだな。」

そこには、街も人も自然もあつた。建物も、今まで次郎が見てきたものと変わりはない。だが、星の直径が地球の半分ほどしかないという決定的な違いがあつた。

「だからジロウの故郷とは少し違ふと思うけど…僕は断然、ゴオカ

ムのほうがいい星だと思うよ。ここは、天国みたいなもんだから。みんな優しいし。」

草原に寝そべりながら、ミケイフは言った。

次郎はゴオカムに入っただけで、思い切った彼に全てを明かしたのだ。情報収集するためにも、また、少年と打ち解けるためにも、そうするのが健全な道だった。ミケイフなら信じてくれて、そして力を貸してくれるだろう、そう信じた。言ってみたら言ってみただけで、彼自身も次郎の言動から何かを感じとっていて、すぐに納得してくれた。この星の住民だからこそうまくいった作戦だろう、と次郎はつくづく思ったのである。

「ほんと、違いなんて探してもないくらいだよ。生物だって、どれも知っているのばかり。ただ……」

次郎は、草原の中心にある広場で遊ぶ幾人かの怪物を見つめた。爪を器用に使い、地球でいう『スポーツ』をしている。随分楽しそうだ。

「……彼らは、地球では変態の義務を与えて、存在を隠して生活しているんだ。」

「そうなの？」

「体を見て分かるとおり……彼らの体は『危険』なんだ。つい最近まで、長い長い『戦い』が続いていた。そのこともあり、物騒な彼らは……より安全な『人間』として生きなければならなくなっている。」

そのおかげで、皆平和に、安心して暮らしていけるんだ。」

「じゃあ……もし、それを破ったらどうなるの？」

突然の質問に、次郎は言いにくそうに答える。

「……今ではそんなことする者はいなくなっただけ……もし、正体を知ると人間の許可なくそれを行ったとすれば……抹殺されてしまうんだ。」

「抹……殺？」

「そうでもしないと、世界は荒れていく一方だ。地球ではそんなだよ。」

ミケイフは、ゴオカムでのそれについて話す。

「ゴオカムでは、彼らの状態については特に定まっていない。性格上、悪い事を考えるやつなんか全然いないからね。それに…」

彼は、もう一つの理由を述べた。

「フィジッカードって、自分の状態ぐらい自分で選びたいはずだよ。どっちが好ましいにせよ、それが強制させられるのは決して気分のいいことじゃないはずだ。そうでしょ？」

「…そうだね。」

それから少しして、ミケイフはいきなり立ち上がった。

「そうだ。ジロウ、博物館に行こう。」

「博物館？」

「ゴオカムについて知りたいんでしょ？あそこなら、色々な資料があるんだ。」

二人はその建物へと駆け出していった。

「將軍、無事お戻りになられてなによりです。」

その頃、ゴオカムの某所には一隻の宇宙船が着陸、乗員が出迎えられていた。

「対宙兵器になにか問題は発生してないだろうな？」

「いえ。すぐにでも作動できる状態になっています。でも、なぜそんなことを？」

男は一瞬ためてから言った。

「地球の船が、ここにたどり着こうとしている。足止めもなんなくすり抜けて来てな。賢い連中だ。」

「交渉に来られたのでしょうかね？」

「さあな、よくは分かっていない。ただ、現時点では…彼らがゴオカムに対し、攻撃をしかけてくるのはほぼ確実だ。それを管理者に伝えておけ。なに…あんなゴミのような宇宙船など、一発で消滅だ。」

「承知いたしました。くれぐれも、「先攻ではなく後攻」で命令しておきます。」

「いい勉強になるよ。ありがとう。」

「いいんだよ、これぐらい。」

ミケイフに連れられて来たそこには、すばらしい情報が詰まっていた。全て頭に入れられないのが残念なくらいだ。そろそろ帰ろうとしたその時、あるものが目に飛び込んだ。

「ミケイフ、あれは？」

次郎の指差す先には、一枚の大サイズの写真が展示されていた。

その写真には、文字がずらりと書かれた石版のようなものが映し出されていた。

「あ、それね。ゴオカムで一番古い建造物とされている、ある遺跡に刻まれていたものだよ。」

明らかにこの星で今使われているものではない文字だ、とミケイフは説明を加える。

「ここには、ゴオカムの歴史に関わる重要なことが書かれていると言われているんだけど、まだ誰も解読できてないんだ。だから、それが可能に近づくため、年中無休でこうやって一般公開をしているんだって。」

次郎はそれに少しばかり興味を持ったため、写真を見ようと歩み寄った。だんだん見える文字が大きくなってきた。その時、彼は気付いてしまったのだ。

「こ…これは…」

「將軍！？どうなされました!？」

一方、側近は將軍なる男の異変を感じ取っていた。彼は、突如自

身の頭を押さえつけ、頭痛が痛いと言わんばかりに声を上げたのだ。
った。

「わ、私のことは気にするな…畜生！こんなことが起こりうるとは！
！なんとということだ…」

彼は、側近に怒鳴りつける。

「すぐに警察隊を呼び、今からいう通りに伝える！」

「…？」

ミケイフは、異常といえる様子を察した。

「ジロウ、ちよつと外に出てる。」

そう言つて、彼は扉を開けた。するとそこに存在したのは、地球
では『警察』と呼ばれる警備隊の人たちだった。

「これは一体…」

「君、ちよつといいかね？」

警備隊の内の一人が、ミケイフの腕を掴んだ。

「何するんですか！？僕は…」

「別に逮捕しているのではない。将軍も命令でな、君と…中にいる
もう一人の少年を、将軍官邸まで連行する。」

第十四話 破滅までのタイムリミット

(ジロウの正体が感づかれたんだ…！)

ミケイフが不安に思う最中に、扉へ歩み寄ってきたのは数名の怪物だった。

「な、何を…」

「殺生などせんよ。強行するためだ、仕方がない。將軍の命令だ。」
怪物は中へと入っていった。ミケイフは、ただそれを見ていることしかできなかつたのだ。危険を知らせる声さえ出せずに。

「すごい…まさかこんなことが…」

「そこまでだ！」

突然背後から声がしたので、次郎は振り向いた。そこにいたのは、醜い灰色の生物である。見慣れているとはいえ、これには少将驚きの表情だ。

「將軍官邸まで来てもらう。」

なぜこのようなことを言われているのか、よく理解できなかった。だが次郎は、言われた通りにする。

「そうだ、早く来い。將軍が待っている。」

一歩一歩、怪物に続いて歩く。だが、その時見えたのは、腕を掴まれるミケイフだった。彼の瞳は、次郎に何かを訴えていた。次郎はそれを受け止め、瞬時に決意した。

「ん？」

「…悪いけど…僕は、まだやる事があるんだ…！」

そう言っただけで彼が取り出したのは、小型銃であった。銃は、フィジッカーの急所とはいいたい部分を貫いた。一体が倒れこむと、それに動揺して他のフィジッカーは次郎から後退した。それに気を引かれているギャラリーを利用し、ミケイフは一人走り出した。

「ジロウ、怪我は？」

「いや、僕はなんともないよ。ただ、この人が…。」

彼は、ピクリともうごかない人型の物体に目をやった。もちろん、死んでいるのではなく気絶しているだけだ。次郎は疑問を抱く。

「…なぜこんなことが?」

「多分、將軍が次郎の存在に気付いたんだ。將軍はなぜか人一倍勘が鋭いから、たまにこういうことがある。…で…ジロウは、これからどうする?」

周りから見られているのを無視しながら、次郎は答えた。

「やっぱり…僕は、ここにいないべきではないみたいだ。ミケイフ、家に連れて行ってくれ。君の父さんに事情を話して、宇宙に上げてもらおう。」

「分かった。すぐに行こう。」

二人は、共に走り去った。運命の分かれ目まで、もう時間は少ない。

「10分後に発射準備が完了、同時に惑星ゴオカムに到着する。」

青く光る星が間近に見えるビ・ダクオンの船内で、バックドラフトの声が響く。そこにドッペルゲンガーが加わった。

「もう少し…待ってくれないか?」

「今更遅すぎる。」

「なら…せめて、この星に調査をしに行かせてくれ。まだ情報が偽りだっていうことも…」

「できる訳ないだろ!」

彼は鬼のような形相をつくる。

「その間に、やつらが動きを知ったらどうなる?全てが台無しだ!…決まった事は変えられん。」

「…次郎がいないからって…勝手な真似しやがって…」

ドッペルゲンガーは愚痴をこぼした。バックドラフトは、操縦席

へ移動しようとした。彼は言う。

「そう思われてくれていいよ。だがな…私は、この船の存在意義を…我々の存在意義を正したいだけだ。」

「存在意義…だと?」

「ああ…それは、地球を守るためにある、ということだ。ゴオカムに情けをかけたせいで、地球が盗まれるのは御免だよ。なんとしてでも、その目的だけは果たさねばならんだ。」

「ジロウ、着いたぞ。」

同じく、とてつもない速さで大気圏突入に成功した宇宙船から、赤い巨人がゆっと飛び出した。まだパイロットは乗っておらず、すぐに発進できる状態だ。

「ありがとうございます。お世話になりました。」

「いいんだよ。人のためになることができれば、ゴオカムの人間は皆喜ぶってもんだ。」

その横から、ミケイフが顔を見せた。

「また、この星に来れる?」

「来れるよ、きっと。色々ありがとう、ミケイフ。」

少年の父親はその時、事態に気が付いた。

「やばいな。政府の連中がもう嗅ぎつけたようだ。」

その何機もの宇宙船の機動音を、次郎も確認した。急いでガギグゲゴに乗り込み、船から離れた。ありったけ入れた食料や飲料水のせいで、機体はやや遅く動いていく。すると、だんだん見えてくるものがあった。明らかに人工物である。しかしそれは、巨大な主砲を発射させようとしているビ・ダクオンだったのだ。

(無事、ここに到着したのか…じゃなくて、何をやっているんだ!? 兎に角、早く行って止めさせないと!!)

ガギグゲゴは全速力で船へ進んだ。

「將軍、これを見てください。」

ゴオカムの対宙兵器が設置されている施設には、その男の訪問があった。

「將軍の予想通り、未確認船があります。見たところによると、この船はゴオカムに向かって攻撃を仕掛けようとしています。」

「途中で中断してくれればいいのだがな。」

「私たちもそれを願っていますよ。」

彼は、モニターの小さい宇宙船を目に収めた。

「その、攻撃とやらは…どこを目標としているか計算できるか？」

「はい。現時点では、第54地区の…市民の住宅街に向けられています。既に住民は避難させておりますよ。將軍の予想のおかげで、いち早く動かせる事ができましたよ。」

「ならいい。それにしても運がいいな…超兵器の隠し場所でもない、そんな場所を狙ってくるとは。」

將軍は笑いながら言った。これが企みの顔でもあるということには、誰一人思わなかったであろう。いや、思うはずがなかった。

「ほんとですよ。しかし…どちらにしろ、攻撃を行った場合は…」
「撃墜だ。…撃墜あるのみだ。」

「準備OKです。」

「よろしい。」

二人の技術者の真ん中で、バックドラフトはレバーに手をかけた。彼は、ここにいるべき者が一人足りないことに気付く。

「ドッペルゲンガー博士はどうした？」

「あっちの部屋で待ってるよ。あれだけ反対してたんだからな。」

ジョンに説明され、再びバックドラフトは前を向いた。少年は鋭く付け加えた。

「船長、俺もこれはあまり好ましい方法とは思ってませんよ。」

「僕もです。」

廉も同じ意見を申した。だが、バックドラフトは心を変えようとはせず、こう言うだけだった。

「地球を、見捨てられない。」

彼はレバーに力を加えた。だが、その瞬間だった。

「ちよつと…待ってください!!」

「次…郎!？」

「先輩!？」

息切れをしながら現われたのは紛れもなく、山田次郎少年だった。

「これは、罨です!!」

第十五話 最終決戦の幕開け

「博士から少し聞きました。僕は、ゴオカムに住む少年から話を聞きましたが…彼らはそんなものを開発していません。それどころか、政府の人間以外はこの戦いのことを知らないのです。」

次郎のこの説明に、一旦、バックドラフトはレバーから手を離した。

「次郎、それは本当か？それと…ゴオカムに行ったのか？」

「本当です。詳しい事は後でお話しますが…こんな攻撃、絶対にしてはいけません。それに、この星には対宙兵器といって、宇宙空間にいる宇宙船を素早く撃ち落とす強力な兵器があります。あやうくお陀仏になるところでしたよ。」

「なんだって？そんなのがあるなんて聞いてないぞ。」

「みんな、騙されていたんですよ。一体、誰がそんな情報を…。」

次郎が怒りを抱いたその時、ソウリンが大声を放った。

「船長！地球から通信です！」

「なんだとお！？」

ソウリンがボタンを押すと、スピーカーから音声が出た。それはレイク・ザーズのものであった。

「こちら、宇宙人の船に忍び込んで通信をしているレイクだ。済まない、先日私を送った情報は嘘だ。言い出すチャンスがなくてな。本当に悪いと思ってる。」

「お前…ちょうどいい時に来たな。私は今、無償にお前の惨殺したい。」

「まあ待て。私はある男から、手を組まないかと誘われたのだ。私が血が騒ぎ…やってしまったのだ。反省はしているとも。」

「貴様、事の重大さに気付いてないようだな。」

「もう分かりきってるさ。だから、危険を冒してでもこうやって真実を伝えているのだ。この様子だと、何もなかったようだな。あや

うくビーム砲でも撃ち込んでしまおうかと思って心配したよ。」

その少年が割り込んだ。

「レイク、地球の状況はどうなんですか？」

「…敵の方の怪物は、ほぼ全滅した。こちら側の被害も寛大だがな。レニウマンも…クツ…。」

「そう…ですか…。」

だが、レイクは口調を変えてなおも話す。

「しかし、問題なのはこの後だ。」

「後？」

「これは本当の話だが、私は船の中で書類を発見したのだ。だがそこには、敵が保有する怪物の数が書かれていた。運悪く、その数は半端ではない。つまりだな…。」

彼は言い切った。

「君たちが蹴りをつけてくれなければ、地球に未来はなさそうだ。」

「…分かっています。」

「よく戻ってきたな。宇宙の端っこまで飛んで行ったかと思ったぞ。」

「仕方ないですよ、燃料切れでは。」

話はまだ済んでいないが、とりあえず次郎は再会を深く喜んだ。

そして彼は、何かを思い出したようにバックドラフトに向き直った。

「小野さん、あと…伝えておかなければならないことがあります。」

「なんだ？」

「ゴオカムは、実は…。」

その時である。

「未確認飛行物体を確認！こ、これはゴオカムの船です！それも大

型の…！」

「なに…！」

「まったく…よくも計画を崩してくれたな。この恩は…返させてもらうぞ!!」

その船は、この男が指揮するものだった。

「將軍、どうしますか?」

「あの船に可能な限り近づけ!その後は私自ら操縦させてもらおう! さあ、交渉だ!!」

「ヤバイこつたな、これでは。」

バックドラフトはサイレンが鳴るビ・ダクオンの中で、頭を掻き
筆った。

「船同士の戦いになるとすれば、宇宙に慣れている彼らの方が有利
だろう。うかつに手は出せん。何か良い考えでも…」

彼が悩んでいると、次郎は案を生み出した。

「小野さん、GセウスとGデメウスはもう出せますか?」

「ああ、とくに改造は終わっている。」

「そうですか…なら、良い方法があります。かなり、危ないですが。」

「將軍、敵船から機械の巨人が飛び出してきました。大2機、小2
機です。それと、偵察艇、戦闘機、タンクがそれぞれ1機ずつです。」

「全面的に戦闘を望んでいるようだな。」

「そのようです。」

將軍はそれを確認した。すると、彼はいきなり、操縦席の主砲発
射ボタンに手を掛けたのだ。

「しよ、將軍!??」

「私に逆らうな!あちらが戦闘準備に入っているのだろう?なら、
こちらから引き金を引くのみだ!ゴオカムのために!さらばだ、地
球人の分際め!!」

宇宙船から発射されたビームは、ビ・ダクオンに向けられた。

「今、ビ・ダクオンが爆発しました…ああ、僕たちの帰るところが…」
「何言ってるんだ。」

ガギグゲゴから、次郎は特に意味もない悲しみの言葉をあげた。
しかしその後には、一人の男がいたのだ。

「おとり作戦、成功だな。」

「よかったですよ。」

通信が入った。廉の乗るコピー・ガギグゲゴからのものだ。

「船長、今の見ましたか？また派手な花火を創ったでありますな。」

「まったく、NASAからたいそう怒られそうで後が怖いな。」

「これから先はどうするんですしたっけ？」

今度は、ギャギユギョ・Nのヤマトからだ。

「敵の船に乗り込むんだ。あの大きさだ、おそらくは將軍とやらが乗っているのに違いない。話をさせてもらおう。」

「將軍！」

「なんだ！」

「敵の巨人たちが、この船に取り付きました！」

「なんだって!？」

男は、拳を叩きつける。

「我々が船のほうに気を取られている間に、彼らは…」

「そんなことはどうでもいい！やつらは、粉碎された母船のことをなんとも想ってないのか！？そんなはずはなかるうー！」

「…私が察するには…その、船はおとりだったんです。」

「…ちい！…ならば…出迎えて始末するのみだ！！」

その船は大型ということもあり、まるで宮殿のような広さだった。人間にも効く銃を構えながら、地球で生まれ育った8人は、着々と奥へと進んでいった。だが、ある一室で彼らは足を止めるしかなくなってしまうた。

「行き止まりかよ…！しかし、なんちゆう広さだ。俺等の船が大破して当たり前だぜ。」

ドツペルゲンガーが文句を言ったその時、暗くて分からなかった部屋の扉から、一人の男が出てきた。

「ようこそ、地球の方々。」

「誰だ！？」

「私はゴオカムで將軍を務めている…カドンという者だ。」

第十六話 惑星ゴオカムの秘密

次郎らは、將軍を名乗るこの男に銃を向けた。だが、男の方も拳銃で身を守ろうとする。

「待て待て。君たちは私と話をしにきたのだろうか？なら、その物騒なモノを下ろしてくれ。」

次郎は目を合わせてから、その銃を下ろした。8人がそうした次に、カドンと同じようにした。彼は、口を開いた。

「全ては、一年ほど前のことから始まった。資源の最後が見えてきたこの青き星ゴオカムでは、エネルギーの枯渇が心配されていた。そう、もしそうなってしまうたら、この星の人間は生きていけない。だから我々は…探索を始めたのだ。」

「新しい…星探しか？」

「そうだ。ゴオカムに代替できるような、環境の整った住みよい星を。それか、資源だけでも見つければ良いと思った。それで將軍として、人々を救えるのなら。だが、そう簡単には見つかるはずがなかった。探索を開始して半年、皆は疲れ果てていたのだ。それでも最後には神が舞い降りた。とうとう、発見したのだ…ゴオカムによく似た、水の星をな。」

それが地球であることは、言うまでもないだろう。そこで彼の口調はがらりと変わった。

「しかし、そこには住民という邪魔者が存在した。たしかに、あの優れた自然の中で、我々のような生物が存在しないはずがなかったからな。そして私は、考えた。どうやってこの星を手に入れるか。結果、このような『地球強奪計画』というものに至ったわけだ。だが、そこには計算外の事実があった。地球には、フィジッカーさえも既に生息しており、それに対抗できる兵器を持っていたのだ。」

少年は、何かを言いたそうな顔でそれを聞いていた。カドンはそれを一瞬見てから、話を続けた。

「この計画には関係なく、Pタイプの開発は50年も前から行われていてな。ただ、学者がフィジッカーの身体能力の限界について調べたかった、というだけの目的でだ。モルモットのように彼らを扱うこのあてもない実験には、市民の反対も多かった。唯一の完成品であるPタイプ一号が死亡したときは、そのピークだったらしい。まあ、その実験自体、それほど規模が大きかったわけではなかった。押す者がいても、返す者がほとんどいない。最終的には、廃止ということに決定された。地球強奪計画が出る直前までは。」

「こいつらを…使っんですかい？」

「ああ、全て頂戴していく。それと、Pタイプ製作の資料とやらも欲しい。」

研究所で老人はカドンの頭を下げた。

「まさか…将軍が使ってくたさるとは、夢にも思ってたませんでしたよ。」

「感謝の言葉を述べるのは、私の方だ。これから…始まるのだよ。」

「なにが…ですかい？」

「いい、ことがな。」

「ゴオカムで最強ともいえる生物を、万全の体制で船に積み、地球へ強襲にかかった。以前、何回か地球に『スパイ』を送り込んでいて、地球人はゴオカムの人間とは違うことは知っていた。偶然か作者の都合か、言葉が通じたからな。故に我々の要求を拒否することは承知だった。そこでこの怪物たちが大活躍…となるはずだったのだ。君たちの操る、巨人の存在さえなければ。」

ここで、バックドラフトが説明を始めた。

「数千年前に、ある男に発明されてな。それからというもの、人類と永い歴史を築き上げていったあげく、今は共存している。それが

地球だ。だが歴史の中で『戦い』が起きていて、そのために対サイ
エンサー…いや、対フィジッカー兵器が存在する。」

「ゴオカムでも同じようなものだ。兵器の存在さえ除けばな。そんな
愚かな行動は起こさない輩ばかりなんだよ、ここでは。」

「なら…なぜですか？」

次郎が会話に介入した。

「なぜ、あなたはそのような…攻撃的な考え方ができたのですか？
ゴオカムの人間なら、できないはずですよ。」

「星を救いたいという意思が強かったのだよ。分かるか？」

「分かりません。あなたは、なんとというか…度が過ぎているのです。
僕がゴオカムで出会った人と比べるとすれば。」

カドンは別の言葉を使った。

「ただ、私は少々変わった性格を持っている、とよく他人からは言
われている。それが原因だろう。多くの人々の支持を受けている理
由でもある。」

「そうじゃなくて…」

その時、彼の頭の中を走るものがあつた。彼はそれを口に出す。

「…まさか…あなた、知っているんですか？」

「なんのことだ？」

「とぼけないでください。この、ゴオカムの秘密です。」

カドンは表情を一変させ、次郎を睨んだ。

「…文字を解読できたのか？」

「やはり、あなたもそのようですね。」

「…だからなんだというんだ…將軍の頭が良くて、何が悪いとい
うんだ？」

「じ次郎、一体なんのこつちや？」

ドッペルゲンガーらが混乱しているところで、それを助けるよう
にバックドラフトが尋ねた。

「次郎、説明してくれないか。その…秘密を。」

少年は、周りを見渡してから言った。

「ゴオカムの…ゴオカムの人間の先祖は、正真正銘の地球人です。」

「へえ。…ってなんですか!？」

ドツペルゲンガー博士を含めた7人ばかりの戦士たちは、その驚きを隠せない。

「じゃ、じゃあ…これはドツキリなのか？」

「まるで違います。まずは、話を聞いてください。始まりは…超古代文明です。」

聞きなれた語句が、彼らがこれに反応しないはずがなかった。

「超古代文明って…セロファンが言ってた？」

「はい。でも、セロファンがこのことについて知らなかったのも無理はないですよ。」

「どうしてだ？」

「ゴオカムの人間の先祖となった人たちは、存在を隠していたのです。僕らと一緒にですよ。…灰色の怪物のために。」

「なんだって!？」

ジヨンは次郎に聞いた。

「サイエンサーを発明したのはセロファンじゃなかったのか!？」

「たしかにそうです。でも…彼より先に、サイエンサーを創った人がいたのです。僕がこのことを知った文章には、『アダムスキー博士』とだけ書いてありました。セロファンと同じように、偶然、生み出してしまったようです。」

もちろん、彼らは発明したからには、生態系を確かめるべく繁殖を行う必要があった。だが後の対サイエンサー組織『紫外線』と同じく、怪物たちがまともに人間と暮らしていけるとは思えない、という考えを持った。だが紫外線とは違い、彼らは超音波のような都合のいい道具は持っていなかった。そのため、現在のアフリカ大陸

を世界の承認の元使用し、密室空間にて事情を知る人民と怪物の生活を始めたのだった。

「だから、最強の悪党でさえもその存在を知らなかった。これも僕らと同じですが、彼らは並外れた高度な技術を持っていました。だから、世紀の大洪水の時も、緊急用の宇宙船で脱出、生き延びる事ができたのです。」

「それで、洪水でフィジッカーはなにもかも消え去ったから、ゼロファンがサイエンサーとして再び世界に出したのか。」

「当時、世界の共通語となっていたのは現在の日本語なので、これと言語の謎も解けました。今では、文字の方は変わってしまい誰一人：私とこの、將軍以外は、昔のことは知りません。」

そして次郎は、話を終わりへ導いた。

「地球の水が退くまでに、船に乗せたわずかな食料が尽きてしまうと推測した彼らは、ある決断をした。それは、このまま飢え死ぬのを待つのではなく：新しい星を探すということ。わずかな可能性ながらも、彼らは見つけたのです。ゴオカムという、希望の光を。彼らは：ゴオカムで新たな文明を開始したのです。」

第十七話 真の敵

「彼らはやがて地球に戻る必要性さえ失い、地球という存在も消え去った。残ったのは、遺跡に書かれた記録だけ。そういうことです。」

バックドラフトは腕を組み、考察した。

「じゃあ、彼らの性格が統一されているのはもしや…」

「おそらく、偶然彼らのほとんどがそうだったからです。船がゴオカムに着くまでに、事故や飢餓でほとんどの人が息絶えた、という事実からも、そう考えるのが妥当でしょう。」

次郎は話が済んだところで、カドンに向き直った。

「あなたはこの事を知っていたのに…なぜ、人々に伝えなかったのですか？」

「伝えようと思っていました。だがその直後、この戦いが始まるようになっていた。ゴオカムの秘密が知られるという事は、今次対戦を知られるという事に等しい。知られては困るのだ。」

「なぜ？」

「分かりきっている。運動が起き、ゴオカムは自ら死を選ぶ。周囲がそれでよくても、私は気に入らんばくてな。」

カドンは、先ほど自分の口で言ったことを塗り替える。

「報告を聞いたときは驚いたよ。あさか、あの星が見つかるとはな。それも再興した、良質な状態で。そして、私はこう理念を創った。」

これは、本当は『強奪』ではない…『返還』なのだ。元々は我々の故郷だ。取り戻す権利がある。攻撃を仕掛けて何が悪い？」

「僕たちの星でもあるのです。」

「いや…我々のものだ。君たちには、消えてもらうという義務が存在するのだよ!!」

彼は高速で動き、少年に銃を向けたのだ。

「命が惜しいのなら、殺しはしない。だが、ここで答えを出さなけ

れば…強奪に移行する。そうなるとすれば、どうあがこうとも君たちに勝ち目はないだろう。」

「それでも…」

「ん？」

アンモニウマンと廉、ジョンに続いて、次郎も腕を上げた。彼は、言葉を続けた。

「それでも、僕らは地球を守ります。」

その時、彼らは異変に気が付いた。

「…その度胸だけは褒めてやる。だが、それで運命は曲がりはない。勝つのは我々なのだ！！」

既に、カドンの体は変化していた。それも、醜い灰色の怪物に。

怪物は凄まじい速度で次郎に襲い掛かった。

「次郎！」

弾を乱射するものの、当然当たりはしない。一度避けた怪物は、再び迫ってきた。

「これで終わりだ！！」

「そうはさせない！！」

飛び込んできたのは、もう一体の怪物。アンモニウマンだ。元態に戻った彼は、カドンの体を掴むとなぎ倒した。次郎がどこからか取り出した小型銃をカドンに向けたところで、アンモニウマンは離れ人間の姿に戻った。

「まさか、一人フィジッカーが隠れていたとは…ちっ…」

次郎は銃を近づけた。

「これは、フィジッカー用の銃です。この状況が分かりますよね？」

「…知っていたのか…私の正体を…」

「推測はできてました。たしか、あなたは常人に比べ勘が鋭いらしいですね。僕はそれを、フィジッカー特有の『特殊能力』を判断し

たのです。だから、万が一の時に備えて、これを装備していました。

「…天才的だな、君は。」

ヤマトとソウリンがカドンを拘束しようとしたが、彼はこう言い放った。

「だが…これで終わりではない…まだ…」

「カドン將軍、あなたは負けたのです。これからゴオカムに行ってもらい…軍の動きを止めてもらいます。」

「…負けてはいない…フフ、フハハハハハ…！！負けたのは…君たちの方だ…！！」

「どういう意味ですか？」

次郎はその言葉が気になり、確かめようとした。だが、特にこれといった動きは見当たらない。カドンの他に自分たちどころにくる船の乗員も、今だ無い。カドンは声を張り上げて笑う。

「まだ気付かないのか!？」

「ええい、一体なんのつもりなんだ!!」

「…そうか…なら、教えてやる!!見せてあげよう…ゴオカムの最終手段を!!」

時は、既に遅かった。カドンは巨大化したのだ。天井を突き破った彼の胴体は、宇宙にも突出した。

「く、空気が…!!」

割れた天井から鋭い気流が発生し、どんどん空気が出て行った。

バックドラフトはすかさず次郎たちを引っ張り、部屋の外へ出し扉を閉めた。船の中はサイレンがなり響いている。

「なに考えているんだあいつは…自殺行為だぞ!？」

「そんなこと言ってる前に、早く気体に戻らないと…わっ!!」

カドンの巨大な腕が振り下ろされたのだ。どうやら、まだ敵は健在らしい。8人は自身の最大の速度で走り、生物が生きれない空間にならない内に各兵器のコックピットへ駆け込んだ。ガギグゲゴの中から次郎は、うっすらとカドンのこの言葉を聞いたのだった。

「Pタイプ一号とは…私のことだ…！」

「Pタイプだつて！？そんな…」

考えている間もなく、巨体はガギグゲゴ目掛けてぶつかってきた。避けると同時に、すぐに仲間の確認をする。廉とジヨンはそれぞれの機体に、残りはギャギユギヨで無事脱出したようだ。次郎はそれが済むと、ガギグゲゴを後方へ移動させ、敵の姿を確認した。だが、それはあまりにも予想外だった。

「…これ…ありえないでしょ…」

怪物の大きさは、ガギグゲゴの十倍にも及んでいたのだ。そう考えている時にも、相手は容赦ない。カドンの足はガギグゲゴへと迫ってきた。

「ていつ…！」

ガギグゲゴは間一髪それをかわす。だが、足はそのまま動いていき、ついさっきまで少年が居た宇宙船に衝突した。その瞬間、一気に船は爆発した。ガギグゲゴは衝撃で動かされる。

「うわっ…このお…！」

やけになり、次郎はGブラストを連射させた。だが、効果は乏しい。

「次郎、いったん退こう！」

「…分かりました。」

「なんなんだ…なんなんだありや！？」

破壊されたビ・ダクオンの残骸の周辺に、次郎らは集まっていた。あれが、Pタイプです。」

「死んだんじゃないかっただんかよ！それに…あれあいくらなんでも反則だぞ！！完璧な大きさはあれなのか！！完璧なら酸素がなくても生きれ…！」

「そんなこと言われても知りませんよ！」

つい出てしまった暴言に、次郎はためらった。しかし、余分な時間などない。迅速な対応が求められているだけだ。

「で、どうする？あのデカブツを倒す方法は？」

「分からない…ただ…このままではやられる…僕らも、地球も。」

次郎は、モニターをチラッと見た。自分たちの居場所が暴れまわる怪物に見つかるまでの時間も、そう遠くない。その時、仲間から声が伝わった。

「先輩、こういう時って…チームワークってというのが大事なんですよね？」

「うん…たしかにそうだけど…」

「廉の言うとおりだ。次郎、力を合わせて戦おう。私もできる限りの加勢はする。」

「おいおいおい、俺は早死になんか…」

「廉、アンモニウマン…行きましよう。勝てるかどうかなんて分からない。でも…やらないよりはいいはずです。地球の…僕らの星のために…！」

第十八話 カドン將軍を破壊せよ

「やっと出てきたか：血祭りにあげてくれる！！」

算儀から姿を現したメカ軍団に、カドンはパンチを繰り出した。

コピー・ガギグゲゴはそれをすり抜けて進む。それに、ギャギユギヨ・N、ギャギユギヨと続いた。だが、次郎の乗るガギグゲゴとそのパワーアップメカ2機は出てこなかった。

「心臓ですか？」

話は会議中から始まる。

「ああ、フィジッカーには人間と同じように心臓というものがある。もちろん、次郎も知っているはずだ。最大の弱点としては、それが一番当てはまる。」

それはアンモニウマンからの発案であった。

「まず、ジョンと廉がやつらの心臓付近の皮膚を攻撃する。それにより、厚い壁は少しは消え、目標への攻撃がしやすくなる。むろん、次郎のゴッド・ガギグゲゴを使うことになる。」

「なら、その間に僕は……」

「次郎は待機だ。」

アンモニウマンのその計画内容に、次郎は戸惑った。

「なぜ僕は戦ってはだめなのですか？」

「この作戦に、ゴッド・ガギグゲゴと君の存在の必要性は絶対だ。

最後まで傷つける訳にはいかないからな。犠牲は我々だけで充分だろう。」

「ゴッド・ガギグゲゴが負けるものですか？」

「必ず勝てるとは言いきれないだろ？なにしろ、相手は完璧なフィジッカーだ。まだ身体能力が全て把握できていんだ。ゴッド・ガギグゲゴにしてもそれは同じ。これは懸けみたいなものだな。『完璧』と『無敵』、どちらが強いかな。なあに、大丈夫だ。必ず成功させる。」

そして、共に地球へ帰ろう。」

「いや、俺が大丈夫じゃないんだが…」

「分かりました…必ずですよ。」

「じ次郎、全ての生き物には権利ちうものがない…」

「作戦…決行です…！」

「みんな…信じてるよ、僕は…。」

一人待機の役目を与えられた次郎は、助太刀できないことを悔やんでいた。だが、その真意には、敵を倒し地球を救うという大きな役割があるということに自覚していた。

「…この機体に懸かっているんだ。一緒に戦って、力になりたいけど…今は待つしかない。ゴッド・ガギグゲゴが必ずしも最強とは限らない。」

彼はモニターを見た。仲間が戦っている。自分、そして地球のため。

「廉とジョン、ここはこっちで敵の気を引く。その間に正面から攻撃してくれ…！」

「了解！」

「承知しました！」

アンモニウマンはそう言うと、ギャギユギヨの操縦席から離れた。

「あとは博士、操縦をお願いします。」

「は!?!」

彼はドッペルゲンガーの背中を、座席へと押し出した。

「俺に何をさせるってんだよ…！」

「カドンを陽動してくれればいい。博士ならできるはずだ。」

「そんなあ!?!…ア、アンモニウマンは何処行くんだ？」

「逃げはしない。これも、計画の内だ。」

アンモニウマンはその言葉を後に、ハッチを開き宇宙へと飛び出して行ったのだ。

「…何考えてんだ…」

「博士!!」

バツクドラフトから声が飛んできて、彼は前を向く。カドンの爪が進んでくる瞬間だった。

「わお!!」

「よし、うまく注目的になってくれているみたいですね。」

廉は予想以上にすばしっこいギャグユギョに心を動かされていた。「やっぱりアンモニウマンの腕は天才的ですね。ギャグユギョでこんな速さが出るなんて。」

「俺も同じ意見だな。さて、俺等ももうそろそろ出番だぜ。」

廉とジヨンはカドンとの距離を一杯詰めた。そして、一瞬を見極めて敵を撃った。

「Gブラスト!!」

「守妬頼苦・刃亜棲賭!!」

爆発と一緒に煙が出る。だが、まだまだ効果は薄いようだ。

「何回でもやるぞ!! 勝つために!!」

「ここか…。」

その頃、こちらはアンモニウマンである。宇宙服に装着してあるジェットを使って、彼はカドンへと近づいていた。

「危険だが…体内に入って脳を破壊すれば、動きは抑制される。それができるのは私、同じ体を持つ者だけにできる業だ。だから…」

彼は隙を見て、暴れまわる巨大な怪物の口の中へと進んだのだ。「存分に遊ばせてもらおうぞ!!」

「くううううううう！！！」

ドッペルゲンガーは精一杯レバーを握り締めた。

「さすが博士。闘争本能のおかげで、こんな隠れた才能が出てくるとは。素晴らしい限りだよ。」

「何が闘争だああ！！俺はああ！！早く逃げたいんだよおお！！！」

「小癩なマネを…私に勝てると思ったか！！！」

カドンは腕を振り回した。だが相手は小さく速く、なかなか当たらない。それどころか、当たってくるビームは彼の精神にとっては苦痛そのものだった。

「この！！！」

彼はやけになって、触手を広げた。すると偶然か、小さい方の機械が絡まった。

「ジョンさん！！！」

「こんなもの…！！！」

廉は触手を取り払おうと、Gプラストを連発した。その内の一つが命中した。

「ふう、あやうく死ぬとこだったぜ。」

「これで借りが一つできましたね。」

「そうみたいだな…」

だがそう会話をしている時、怪物の鋭い爪が加速しながら迫ってきた。避けている時間はない。

「危ない！！！」

ガギグゴは、ギャギユギョ・Nに盾の如く近寄った。爪は止まらない。だが、その時。

「あがががが…」

カドンは頭を抱えながらもがき苦しんだのだ。当然、腕は既に別の位置にある。

「どうなってるんだ？」

やがてカドンは動きを止めた。ギャギユギヨもそれに応じてか、陽動を中断した。そしてカドンの口から出てきたのは…。

「アンモニウマン!？」

「カドンの脳をいじった。ひとまず、今はこの状態を保てそうだから、すぐに次郎に連絡を！」

「来たか…よし!!」

合図を受け取ると、次郎はガギグゲゴちGゼウス、Gデメウスを前進させた。

「アシステイング!!」

彼が言うと、メカは分解し、ガギグゲゴの全身、各部分へ合体した。

「無敵機動要塞、ゴッド・ガギグゲゴ!!」

第十九話 完璧な怪物VS無敵の巨人

「次郎、さっさと息の根を止めてくれ!!」

ガギグゲゴは言われるがままに、カドンの心臓の前まで近づいた。廉とジョンの攻撃のおかげで、心臓はむき出しと言っていた状態にあった。自身の操るロボから必殺技を発せば、勝利は確実である。

「これで終わりだ!!射威認虞・紅羅ツ写亞ああ!!」

Gバスターの先端から生まれた光は、カドンの弱点へと直進した。だが、その時だった。

「よくも…やってくれおつたな…!!」

怪物は突然、鎖が解かれたように動き出し、光線を軽々とかわしたのだ。

「全てが完璧なら、再生能力も完璧なんだよ!!」

カドンは言い放つと、ゴッド・ガギグゲゴに拳を向けた。その速さにおいつけないらしく、ガギグゲゴは全く動かない。

「次郎!!」

「先輩!!」

しかし、ゴッド・ガギグゲゴとてその名に偽りはなかった。

「Gバリアー!!」

機体全体を瞬時に薄い膜が覆い、カドンの拳はそれとぶつかった。「なんだこれは…私に小細工が通用するものか!!」

それでもカドンは強引に爪を押し込んできた。すると、バリアーにわずかながら穴ができた。

「…あいつには問答無用か…」

次郎は呟くと、今度はバリアーを保ちつつガギグゲゴを大きく旋回させ、カドンの背後に回った。敵が振り向く前に攻撃をする。

「Gブラスト!!」

合体後でやや威力が上がっているようだ。命中したGブラストはカドンの体を焼いた。勢いに乗り、もう一機のガギグゲゴとギャギ

ユギヨ・Nも加勢する。

「この調子でとどめを!!」

「よし!!」

バリアーを解いて、ガギグゲゴはGバスターを展開した。だが、それが隙を創ってしまったのだ。

「おら!!」

止まったかに思えたカドンは、また動き始めた。カドンの腕でゴツド・ガギグゲゴは叩かれた。

「ああああああああ...!!」

衝撃が加わり、ガギグゲゴは飛ばされた。

「私が...完璧なる獣が、そんな機械の分際に...負けるものか!!かかってこい!!全力でな!!」

「せ、先輩は!?!」

「通信が取れないんだ!!...ああ!!」

カドンの力はとどまる事を知らない。幾たびも爪を差し向けてくる。

「どうした!?来ないか!!」

ジヨンは襲い掛かる攻撃をすれすれで避けた。その直後でビームを発射。相手は弱まっているが、こちらも同じだ。

「なんてこった...これで倒せるのか...」

「博士!もつと速く!!」

「できたらとつくにやってるよお!!」

ギヤギユギヨも巻き込まれながら、位置をとる。

「次郎はなにやっつてんだ...俺らをおいて先に逝きやがったのか!?!」

そう冗談半分でも思っても、確かめるほどの余裕はない。その時、廉から連絡が入った。

「博士、こんなときになんですけど、ちょっと質問があります。」
「ほんとなんだが…この際だ！早く言え！！」

「ゴオカムの大気圏って、地球とか普通の星より薄いんですよね、たしか。」

「ああ、そうだ！だから！あいつらは気軽に宇宙旅行に行けるんだよ！！」

「つまり、隕石とか落っこちても、あまり燃え尽きたりしない、ということに…」

「その通りだ！！」

答えると、ドッペルゲンガーはモニターから廉の乗るガギグゲゴの位置を探した。だが、この時見えたのは…。

「ちょ、廉！てめえなにやってんだ！！」

「何って…僕はゴオカムに用があるんですよ。じゃ、頑張ってください。」

コピー・ガギグゲゴはこの戦時下の中で、ゴオカムへと降下していったのだ。

「…ここは…」

次郎は目覚めた。カドンに押されて、今はゴオカムの船の残骸で静止している。

「機体は…」

次郎は確認した。ゴッド・ガギグゲゴは右腕と両足を失っていた。頭部も多少破損していて、コックピットの状態がいつもと違っていた。

「まだまだ…たかが手足が壊れたぐらいで…Gバスターさえあれば…」
彼は意識がもうろうとしていた。このままでは、勝ち目はない。

「僕がいかなきゃ…いかなきゃならないんだ…」

それでも次郎は最後の力を振り絞り、動こうとしていた。

戦闘からゴッド・ガギゲゴという切り札が離脱してから、30分は経過しただろう。

「ハアハア…ちっ…！」

休んでいる暇もなく、相手は攻撃してくる。ジヨンはもう体力の限界が近づいていた。

「しっかりしてくれ！」

「しっかりって…俺は機械じゃないんですぜ…おっと…！」

ふと気が付いたときには、ギャギユギョ・Nはカドンのおもちゃになっていた。

「破壊してやる…！」

「やめろ…！」

ギャギユギョは刃を使って切り裂こうとする。しかしカドンの素早い対応に追いつけない。

「死ねええ…！」

カドンが目を光らせたその時。

「な、なにに…！」

ゴオカムから、光が飛んできたのだ。

「まさか…対宙兵器…だと…！」

連射されるビームはカドンの体を消し去っていった。

「何が起こっているんだ…？」

「博士、廉ですよ…！」

「廉？」

ドッペルゲンガーはジヨンに言われ、眼下に広がる青い星を見つめた。

「そうか…廉がゴオカムの連中を説得したのか…いいことりやがつて。」

そして、好運が度重なった。

「あれ？博士、あれは…！」

「…宇宙ゴミじゃないのか？」

「いや、違う…あれはゴツド・ガギグゲゴだ！！次郎だ！！」

遅いながらも到着した次郎は、ゴオカムからの攻撃に苦しむカド
ンに、ターゲットを合わせた。

「嘘だ…これは夢だ…！！私が裏切られるだど！？…信じられるか
！！私は完璧で、天才で…將軍なんだよ！！」

「いいえ、違います。」

次郎は音量を上げて、カドンに言った。

「あなたはもう、ゴオカムの將軍ではない。…將軍として相応しく
ない、醜い怪物だ！！」

彼はボタンを押した。未来を掴むために。

「射威認虞・紅羅ツ写亞！！」

第二十話（最終話） 旅立ち

「まったく、一時はどうなるかと思ったよ。」

「それ、僕のせいですか？」

ドッペルゲンガーはやや怒りの表情を浮かばせながら、廉に軽くそう言った。次郎は彼に変わって弁解する。

「でも、廉のおかげでカドンを倒せたんですよ。まさか、あの状況での判断ができるなんて、普通の人間には思えませんよ。」

「先輩、フオローになつてません。」

そこにジョンが入り込んだ。

「その間が大変だったんだぜ？本気で死ぬところだったよ。」
「すみません。」

ジョンの文句に、廉は苦笑したのであった。

カドンは、宇宙に散っていった。廉が説明したことによるゴオカムの改心、まさかのゴッド・ガギグゲゴの生還、全てが彼を殺したのだ。彼はこの世界から消滅するべきだった。だから、運命はより皆が望む方へと動いていったのだろう。

「それにしても、こりゃ報告書じゃ済まされんな。機体はほとんど壊れ、船も失つて……」

「結果がよければいいんですよ。大佐も許してくれるはずですよ。」

「どこかで聞いたこのあるようなセリフだな、それ。」

「気のせいですよ。」

しばらくしてから、他の四人がやって来た。政府との交渉が済んだのだろう。もちろん次郎たち5人もそれに加わりたかったが、戦闘後の疲れを癒した方がいいと止められていた。

「よう、どうだったか？」

「失敗したわけないだろ？元々あまり知らされてなかった計画だ、すぐに軍の連中に中止命令を出させるってさ。」

「そう、それでいい。俺等地球人の完全勝利だ。」

「あとは、今後じっくりゴオカムの隠された歴史を明かしていけば終わる。それとだな…」

バックドラフトは暗い表情をつくった。

「あと一つ、深刻な問題がある。」

「…本当ですか？」

彼がそう言うってからドツペルゲンガーの状態は一変した。

「やめてくれよ…まさか、カドンはまだ生きている、とかなんとか言うんじゃないだろうな。」

「博士は想像力が豊かだな。だが、それは違う。」

「なんなんだ？」

彼は答えた。

「問題は、この星の未来だ。」

「なんだ、そんなことか。」

「なんだとはなんだ。」

ドツペルゲンガーの口調は元に戻る。

「將軍の独断とは言えど、俺等に攻撃を仕掛けるような悪い星だ。罪滅ぼしじゃないが、今は放っておくしかないだろ。」

「博士、それは酷いですよ。」

「なら地球を差し上げるのか？俺等は何をしに来た？地球を守るためじゃなかったのか？」

「…そうなんですけど…」

メンバーが必死に考えてる中、アンモニウマンは何かを思いついていた。

「…たしか…ゴオカムの人口は…」

「10億人ちよいでありますよ。」

ソウリンが彼の自問に答えた。

「星のサイズが小さいせいなのか、環境が若干異なっているせいな

のか、地球よりかなり少ないのです。」

「そうか…じゃ、策は簡単だな。…ゴオカムの人間を、地球へ引き入れよう。」

「は!？」

アンモニウマンの言った事が聞こえたドツペルゲンガーは反論する。

「おい、さっき俺が言った名言をもう忘れたのか？」

「そうじゃない。地球を上げるのではなく…ゴオカムと地球、二つの人間が共存するんだよ。地球という星でね。」

しかし、次郎もまだ納得ができない。

「いい考えだと思うのですが…大丈夫なんですか？ほら、地球だって環境問題とか食料問題とか、色々あるじゃないですか。10億人という数ですよ。」

「計算済みだ。」

彼は得意げに説明した。

「実を言うと、その、地球上で起こっている問題は…ほとんど対サイエンサー組織が原因なんだ。」

「そうなんですか!？」

「地球規模の重要な団体だ。だから、食料や化石資源を大量に所有してるし、その上優れた技術により環境を悪化させているのも私達だ。それが解体され、持っていたものを手放すとなると…充分客を受け入れるスペースができる。」

その時、放送が流れた。船の出発を知らせるものだ。

「じゃあみんな…行きますか。」

次郎は走った。

「面白いことになったな。」

RCは呟いた。彼の視線は、UFOの通信機に向いている。隣に

は先日彼と初顔合わせをしたレイクがいた。

「助けるのか、悪者共を。」

「それは貴公も同じだ。見捨てることはないだろう。少なくとも、ゴオカムへの『派遣隊員』たちの思考では。」

悪党なりにそれを聞いてから、レイクはゴオカムから送られてきた内容をしっかりと確認した。

「そついやあんた技師とか言っていたな？…超音波発生装置を生産しているのもあんたか？」

「ああ、そうだ。忙しくなりそうで困ったよ。今から作業に入らないと間に合わんかもしれんな。」

「間に合わなかったらどうする？」

「どうにでもなる。」

レイクは笑いながら言った。

「それでも、音波の効力によっては感じるだろうな。『いつのまにか周りの人が増えている』と。」

「別に、日本語使用者だからといって全て日本に入れるのではない。日本は狭い国だ。世界中に散らばらせるのだろう。」

「ますます笑みを増やしながらレイクは尋ねる。

「それもまた、いずれは『全世界で日本語ブーム』とメディアで放映されたりしそうだな。」

同じように笑いながら、RCは答えた。

「その通りだ。」

「父さん。」

ミケイフは呼んだ。彼の乗る宇宙船は、ゆっくりとゆっくりと進んでいる。しかしそれは彼らが感じているだけで、実際の速度は計り知れない。35光年の距離である。

「これが、新しい星だね。」

ミケイフは指を使って、友から貰った写真でそれを示す。父親は星を見た。

「ゴオカムに似ているね。」

「そうみたいだな。」

「いくら似ていても、僕はゴオカムのほうが好きだよ。」

ミケイフは、前にも同じようなことを言ったな、と思い出した。

そこに、次郎がやって来た。ミケイフの父は、次郎のほうを向く。

「悪いな、こんな招待までさせてもらった。」

「いいんですよ、あなた方にはお世話になりましたから。あ、見え

てきましたよ。」

モニターには、大きく青い星が映っていた。3人は目を輝かせた。

「あれが僕の住む星、地球です。」

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9927d/>

超リアルロボットストーリー 超機動要塞ガギゲゴG t o G

2009年4月24日05時06分発行

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。